収録論文 一覧日本語学論説資料

第一分冊(国語学一般・国語史・文字・表記)

一 国語学一般

第二輯 (一一:二) 日本語教育史論考	(一二・一〇) 日本語教育研究 五八長沼スクール 日本語教育研究 五八	二〇一(一一・一一)	二〇一(一一・一)	二〇一(一・一一) 全国大学国語国文学会 文学・語学	二〇〇(一一・七)	二〇〇(一一・七) 文学・語学 全国大学国語国文学会 文学・語学	実践国文学 八〇(一一一〇)	ビュー 三-二(一二・一〇) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	究紀要 三-二(一・三) 國學院大學伝統文化リサーチセンター研	(一・一二) 國學院雑誌 一一二-一二	(一・一一) 國學院雑誌 一一二-一二	(一一・一○) 國學院大學院友学術振興会 新國學 三	(一二·三) (一二·三) (一二·三)	教育研究 二(二二三) 桜美林大学大学院言語教育研究科 言語
猪『日本文典初歩』との比較を中心に――陸奥廣吉『日本語会話コース』の考察 ――馬場辰	いた言語教育者としての信念を考える――長沼直兄の戦前・戦中・戦後 ―激動の時代を貫	「国語学(古典語)」研究の諸相	危うさの上に花開く多彩さ	古典語研究の問題点と展開	国語史研究の可能性	日本語史はどのように可能か	──日本語学の成果を海外に発信するために時代名を含む日本語学の論文の英文タイトルにつ	日本語通時コーパスの設計について	折口信夫の「日本紀の会」と『日本書紀』研究	NIPPONGO [日・泰・會話本] についてタイ人向け日本語教科書『日暹會話便覽』・	国男に焦点を当てて――純化論の観点から見た近代国語観の変遷 ―柳田	―東丸神社蔵『神代聞書』翻刻を通して―青年期における荷田春満の『日本書紀』研究	の下位分類を踏まえて――――――――――――――――――――――――――――――――――――	―日本語語彙データを中心に― 南米在住の日系児童生徒の口頭言語能力調査
金	河	倉	神	村	小	安	福	近	渡	伊	大	渡	孫	竹島佐
沢	路	田	戸	Щ	野	田	嶋	藤	邉	藤	野	邉		村田木
朱	由	靜	和	昌	正	尚	健	泰		孝	眞			徳美倫
美	佳	佳	昭	俊	弘	道	伸	弘	卓	行	男	卓	羽	倫幸子
40	27	三四	===	<u>=</u>	=	七	23	19		12 (49-1)	6	-	**	1

(一二·三)	上智大学国文学科紀要 二八 (一一:三)	言語文化研究 一〇(一一三) 静岡県立大学短期大学部言語文化学会	佐賀大国文 四〇(一二三)	(一一:11)	二二(一一:三) 神戸女子大学国文学会 神女大国文	── - (一一·一) 慶應義塾大學藝文學會 藝文研究	(一一・七) 京都外国語大学研究論叢 七七	(一一・一) 京都外国語大学研究論叢 七六	(一・三) 岐阜大学留学生センター紀要 二〇一〇	(一一・一) 関西大学国文学会 国文学 九五	(一二:三) 人文研究 一七六神奈川大学人文学会 人文研究 一七六	(̄ー·Ξ) ○九(平成二一)年度研究報告 二八 大谷大学真宗総合研究所研究紀要 二○	ーション学科論集 一三(一二九) 茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケ	ーション学科論集 一二(一二三) 茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケ	(一二:三) 爱知県立大学文字文化財研究所年報 五	愛知県立大学説林 六〇 (一二三)	愛知県立大学説林 六〇 (一二三)	(一一・三) 受知教育大学大学院国語研究 一九	文学報 六九(一一三) 愛知教育大学国語国文学研究室 国語国	愛知大学文学論叢 一四五 (一二:二)	愛知大学文学論叢 一四四 (一一・七)	二 国語史
『節用早見二重引』について	正期和書目録稿上智大学大学院国文学専攻所蔵森岡文庫(明治大	○年刊行の日本語教科書を資料として―明治期日本語教科書の他称 ―明治三八年から四	の使い分けにかかわる場面の内実『桑名日記』にみる近世末期下級武士の待遇表現	宛書状の紹介と検討	陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究――宮内庁書松江藩松平家と公儀鷹匠・鷹匠同心 ―宮内庁書	古代のことば ― 踏歌詞の伝統と変化―	オヤングレン著『日本文典』(その二)	オヤングレン著『日本文典』(その一)	植民地下朝鮮からの女子内地留学生(1)	戦中期における海外邦字新聞の字音仮名遣い	黒野義文『露和通俗会話篇』 について	較を通して―ての予備的考察 ―専修寺本・西本願寺本との比ての予備的考察 ―専修寺本・西本願寺本との比『顕浄土真実教行證文類』(坂東本)の特徴につい	(7) アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿	(6) アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿	史〉からの提言― 譜本としての『平家正節』 ―〈日本語アクセント	天草版平家物語と平家正節のt入声特集: 天草版平家物語―原拠本と日本語の歴史―	平家物語と日本語史特集: 天草版平家物語―原拠本と日本語の歴史―	『国語教育誌』の書誌と記載内容概要(三)	中華民国人だった一人の台湾人の履歴書より―廖継思著『徳聰の履歴書』 ―清国人・日本人・	啓蒙思想と「国語」辞典(その二)	啓蒙思想と「国語」辞典(その一)	
今	服	本	山	星石福平千	三	藤	岡本	岡本	太	井	小	藤	櫻	櫻	上	犬	吉	有	廖中	早	早	
野	部	間	本	野井島藤々	保	原			田	П	林	元	井	井	野	飼	田	働	田	Ш	Щ	
真		美奈子	志帆子	靖 直喜和 人 二敦之子到	忠	茂	信照	信照	孝	佳		雅	豪	豪	和		永		継敏			
$\vec{=}$	隆	子	子	二敦之子到	夫	樹	訳	訳	子	重	潔	文	人	人	昭	隆	弘	裕	思夫	勇	勇	
八一	162	七四四	154	136	六五	五四	126	115	106	95	* * *	四八	87	80	四 五	*	*	三六	67	56	46	
										(49-1))											2

山 山 電 文 ののロ 本 点電 つ古 月 て長 四 図語小 引電 六 日 本 向萬 上 日 日 日 日 東 日 対引	東毎大学日本文学会、相南文学、四五四文・八九(一・九)	本語日本文学文化学会 専修
日本語教育史に登場するエスペランティスト 上代特殊仮名遺研究における未解決の問題 上代特殊仮名遺研究における未解決の問題 日本の近代国語教育における五十音図の役割 日本の近代国語教育書を中心に― 明治期の国語教科書を中心に― 明治期の国語教科書を中心に― 明治期の国語教科書を中心に― 明治期の国語教科書を中心に― のア王寺国際仏教大学恩頼堂文庫蔵『筆体口伝』 医慶天皇の差声法 ―『仙源抄』の声点をめぐって― 「月ケ瀬本仮名書き法華経』解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「月ケ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字(二) 「日葡辞書』中の、イソップ寓話から保物語』との対比― 『海国図志』と日本 ―塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について―「岩はしる垂水」を中心に― 『海国図志』と日本 ―塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について―「岩はしる垂水」を中心に― 『連解新語』と改訂版に見られる日本語の一考察―山口鷺流の位置(上) ―江山本所収曲をめぐって―山口鷺流の位置(上) ―江山本所収曲をめぐって―山口鷺流の位置(下) ―江山本所収曲をめぐって―山口鷺流の位置(下) ―江山本所収曲をめぐって	日本語教育史に登場するエスペランティスト先史アジア語とその残影(四) ためまでは、「大学」との対校から――――――――――――――――――――――――――――――――――――	文字使用から見た専修大学本源氏物語「桐壺」
稲 稲 竹 吉曳菊金 吉曳菊金 吉 阿 黄 野 坂 金 土 髙 佐 🔠 釘 毛 安 関	関 岡 近 濱	斎
稲 稲 竹 吉曳菊金 吉曳菊金 吉 阿 黄 野 坂 金 土 髙 佐 Attana 貫 利 田 田 田 田 見田地森 見田地森 見 川 澤 本 子 佐 田 藤 priyan ake 貫 利 田 秀 秀 裕 孝美真亜 孝美真亜 孝 修 當 勝 清 秀 宗 正 尚 正	嶌 藤 萠	藤
田 田 田 見田地森 見田地森 見 川 澤 本 子 佐 田 藤 prì ya a 貫 利 田 秀 秀 裕 孝美真亜 孝美真亜 孝 修 當 勝 清 秀 宗 正 尚 正 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由	E 偉 健 遠	達
雄雄姫 夫那子希 夫那子希 夫 三 時 夫 恵 馨 里 平 進 な 亨 守 道 昭	E	哉
三 三 三 239 230 三 222 208 三 二 二 二 二 二 三 二 二 二 二 二	<u> </u>	九一

(一一·一一) 上代文学会 上代文学 一○七	(一一・五) 解釈と鑑賞 七六-五至文堂 国文学 解釈と鑑賞 七六-五	(一一・五) 解釈と鑑賞 七六-五至文堂 国文学 解釈と鑑賞 七六-五	言語文化研究 一〇(一一三)静岡県立大学短期大学部言語文化学会	佐賀大国文 四〇(一二:三)	(一二・五) 國學院雜誌 一一三-五	(一一·一一) 國學院大學 國學院雑誌 一二二-一一	一○一-一(一一・一二)	学研究 四六 (一一二) 熊本大学文学部国語国文学会 国語国文	一四八 (一一一) 京都女子大学国文学会 女子大国文	(一二一) 京都外国語大学研究論叢 七八	(一一・七) 京都外国語大学研究論叢 七七	語国文 八一-七 (一二:七)京都大学文学部国語学国文学研究室 国	語国文 八一-二(一二:) 京都大学文学部国語学国文学研究室 国	一二二(一十二) 九州大学国語国文学会 語文研究	一五-二(一一·三) 沖縄国際大学日本語日本文学研究	文学系/芸術・文化学系 三(一二:) 桜美林大学 桜美林論考 人文研究 人	(一・一) アクセント史資料研究会 論集 七	(一・一)	三文字・表記	一六八(一二·一〇) 早稲田大学国文学会 国文学研究	一六六 (一二・三)早稲田大学国文学会 国文学研究	国文学編――五九 (一一一)早稲田大学教育学部―学術研究―国語・	山梨英和大学紀要 九(一一:)
『万葉集』の〈義訓〉	『風土記』研究の可能性	式をとり入れて 一木簡・人麻呂歌集の書	遣いについて 石川倉次著『はなしことば の きそく』の仮名	仮名遣解説 一古典導入のための歴史的わたしならこう書く 一古典導入のための歴史的	文字の使用状況から見た源氏物語花散里写本	『古事記』「祖」字の用法	仮名はなぜ清濁を書き分けなかったか	成(二)― 《引用漢文》の領野 ―武田泰淳『司馬遷』の生	吐魯番阿斯塔那墓出土文書の則天文字小考	音本位か― 汝の名はかくして変わる。―漢字人名は字本位か	と記号としての漢字観――――――――――――――――――――――――――――――――――――	名遣いのよりどころ―― 定家仮名遣い再考 ― アクセント体系変化後の仮	「涙」の表記情報	字体からみた『新訳華厳経音義私記』の撰述手法	万葉集歌の文字遣い ―「灼然」を中心に―	けについて― 「古事記』の表記と表現 ―「我」と「吾」の使い分	漱石自筆原稿のルビ再考―『道草』のルビから―	―その字体と仮名遣いについて――売豆紀神社蔵 養法院筆『古今和歌集』の仮名		―漢語アクセント史構築のために――『名目抄』所載の漢語に差された声点について	漢語辞書の語釈	『和漢朗詠集』と『古状揃』― 教材『平家物語』のはじまり ―キリシタン版	って― 古事記の歌の構成 ――仁徳と石之日売の歌をめぐ
奥	橋	毛	中	白	斎	谷	屋	道	西	朱	朱	坂	田	賈	田	張	佐	坂		上	今	菊	石
田	本	利	野	石	藤	口	屋名池	遠	崎			本	村		場		藤	本		野	野	野	田
俊	雅	正	真	良	達	雅		達		_	_	清			裕		栄	清		和	真	雅	千
博	之	守	樹	夫	哉	博	誠	也	亨	星	星	恵	隆	智	規	平	作	恵		昭	Ξ	之	尋
四〇九	四〇五	M 00	269	三九六	兲人	풋	三六〇	蓋	를	265	261	畫	三四	三七	三〇九	二九七	249	二八四		三大	三十三	二六六	芸
											(49	-1)											4

	四九二	夫	敏	島	高	寶「釋南」 ―白川文字學の原點に還る(五)―	要 六 (一二:七)立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀
	門一	昭		村	中	交代について 万葉集の訓字表記・融合表記・表音表記の文字の	無窮会 東洋文化 一〇四(一〇・四)
	四七五	喬		木	鈴	「あさなぎ木簡」における「也」字	美夫君志会 美夫君志 八二 (一一:三)
	四六三	唯		田	吉	懐集』を中心に――存覚(撰)『諸神本懐集』と法然(仮託)『諸神本視覚テクストとしての〈真名〉と〈仮名〉について	(一一・三)
	349	千寿子	千		郡	における漢字表記と振り仮名― 国語資料としての『都花月名所』―江戸時代後期	(一一一〇)
	343	優		島	田	序説 仏教語における音写語の文字論的・語彙論的研究	・思想― 一七三(一二・三)日本文芸研究会 文芸研究―文芸・言語
(4	四五四	志	猛	岡	福	古代行政地名の表記原則をめぐる一考察	
49-1)	四八	麻衣子		藤	佐	世握虎稚物語』の調査から 送り仮名の規範と問題点 ―享保期浄瑠璃本『出	七 (一一·三) 日本女子大学大学院文学研究科紀要
	*	華	保		呉	崎にて」を中心に――――――――――――――――――――――――――――――――――――	的日本文化研究 三(一二三) 現代文化研究センター JunCture 超域名古屋大学大学院文学研究科附属日本近
	338	士	軒	葉	千	として――「天草版平家物語難語句解」の拗音ヂャを中心―「天草版平家物語難語句解」の拗音ヂャを中心キリシタン文献における四つがなの表記方法	究) 五(一一三) 室 Nagoya Linguistics(名古屋言語研究) 五(一一三)
	327	莉			張	古代中国・日本の鳥占の古俗と漢字	二九 (一二·三) 同志社女子大学 総合文化研究所紀要
		廣	信	藤	安	の日本における受容について――『イソップ物語』受容の一側面 ―『伊娑菩喩言』	(一一·一) 東京女子大学比較文化研究所紀要 七二
	<u>四</u> 三	子	久	橋	高	其の一真福寺資料に見られる漢字の通用現象について	六三 (一二·一) 東京学芸大学紀要 人文社会科学系一
	313	婕尚		澤	劉北	て『魔風恋風』の初出本文と初版本文の異同につい	六二(一一·一)東京学芸大学紀要 人文社会科学系一
	四 七	也	卓	森	沖	『古事記』における音仮名ホ・ボ	ハ九-二 (一二:) 東京大学国語国文学会 国語と国文学
	307	Sami Honkasalo	lonk	ni E	Sar	A Cognitive Approach to Character Formation in the Oracle Bone Script	東京大学言語学論集 三一(一・九)
	284	哉	達	藤	斎	名字母と漢字―――――――――――――――――――――――――――――――――――	国文 九一(一二‧九) 専修大学日本語日本文学文化学会 専修
	276	Noriko NAGATSUKA	ATSI	riko AG,	Z_{N}^{0}	Effects of Script Types in Japanese Aphasia: Katakana Behaves More Like Kanji in Comprehension, but More Like Hiragana in Writing	上智大学 Sophia Linguistica 59 (一二·三)

*・・・・論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文

**・・・・特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文

***・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

(一二:三)	(一・三) 岐阜大学留学生センター紀要 二〇一〇	神田外語大学言語科学研究センター(一二・三)	神田外語大学言語科学研究センター(一一:)	Scientific Approaches to Language 10(一一・三)	六二二 (一一·三) 関西学院大学日本文学会 日本文藝研究	一四八 (一・一〇)	大手前大学論集 一二 (一二:三)	大手前大学論集 一一 (一一:三)	文研究 六三(一二三) 大阪市立大学大学院文学研究科紀要 人	日本語・日本文化 三八 (一二三)大阪大学日本語日本文化教育センター	日本語・日本文化 三八 (一二三)大阪大学日本語日本文化教育センター	(一一・九) 大阪大学世界言語研究センター論集 六	(一二:六)	文と教育 四四(一二三) 愛媛大学教育学部国語国文学会 愛媛国	ニー(一・三) 宇都宮大学国語教育学会 宇大国語論究	四二 (一二:三) 青山菩文四二 (一二:三)	四二 (一二:三) 青山等院大学日本文学会 青山語文	愛知県立大学説林 六〇 (一二:三)	《一一二》	化 二五 (一・七)愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文	文法
動詞「着換ふ」の格支配について	「感情表現+ことに」の周辺	空主語の意味解釈と主題化	The Essential Requirement for an Independent Sentence (Preliminary)	A Note on Illocutionary Force and Modal Particles	現代語におけるサニ構文と語形成	ノダとワケダから見た国会議員の語り方について	のメタ言語― ―認識的モダリティ意味記述推論の多義的解釈 ―認識的モダリティ意味記述	カモシレナイ・ニチガイナイと推論の方向性	期間を表すマデと期限を表すマデ	― (存在) という意味成分に基づく再検討―なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのか	「のだ」の結果用法と過程用法	Word Grammarによる動詞活用へのネットワークの形態統語論的分析―	をめぐって― 一受益者を高める用法オ型謙譲語の用法の歴史 ―受益者を高める用法	性の連続性性の連続性とまりである程度性とましずいである。	を中心に―中古語「ヤヲラ」について―アスペクト的な意味	副助詞の概念ととりたて助詞の概念	BCCWI複合辞辞書について	天草版平家物語と捷解新語 - 謙譲語を中心に-特集:天草版平家物語-原拠本と日本語の歴史-	間投助詞はどのように位置づけられてきたか	日本語におけるEvidentiality ―形態素「-i」―	
小	加	長谷川	ΚA	YO	清	伊	木	木	藪	今	中	吉	森	葛	田	多	近	福	伊豆原	Щ	
田	藤	氚	KAZUKO II	YOSHIO ENDO	水	土	下	下	崎	井	田	村			和	田	藤	沢	蒝	本	
	由紀子	信	O INOUE	EN	泰	耕	り	り	淳		_	大	勇	金	真紀子	知	泰	将	英	雅	
勝	学	子	UE	DO	行	平	か	カュ	子	忍	志	樹	太	龍	子	子	弘	樹	子	子	
<u>-</u>	135	120	112	106	96	91	84	77	65	51	34 (49-2	20	<u>一</u> 四	* *	14	四	_	*	8	1	

(一一・三) 衛玉大学 国際交流センター紀要 五	ICU日本語教育研究 八 (一二:三)国際基督教大学日本語教育研究センター	ICU日本語教育研究 七(一一三)国際基督教大学日本語教育研究センター	(一一・一二) 國學院推誌 一一二-一二	(一・一) 國學院大學 國學院雑誌 ーーニーー	神戸松蔭女子学院大学 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) 15 (一一:□)	神戸松蔭女子学院大学 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) 15 (十二十二)	(一二·六) (一二·六)	(一二:六)	神戸外大論叢 六二-五(一一・一)	(一一-九) 自然言語処理 一八-四	(一二:三) 慶應義塾大学言語文化研究所紀要 四三	(一二:三) 慶應義摯大学言語文化研究所紀要 四三	(一一·三) 慶應義塾大学言語文化研究所紀要 四二	(一一・三) 慶應義塾大学言語文化研究所紀要 四二	(一二·三) 群馬県立女子大学国文学研究 三二	(一二六)	学研究 四六 (一一:二)	(一二:三)	二八 (一一:三) 共立女子大学国際学部 共立国際研究	京都橘大学研究紀要 三七 (一一一)	語国文(八〇-四(一一四)京都大学文学部国語学国文学研究室(国	会《言語科学》四七(一二:三) 九州大学大学院言語文化研究院言語研究
面構成力「は」「が」の揺れから解く小説における作者の場	る再調査― 「をVNだ」 構文の出現頻度 ―Google 検索によ	「をVNだ」構文の出現頻度について	心に― 日本語動詞活用の分類 ―ロドリゲスと宣長を中日本語動詞活用の分類	「神逐らひ逐らひ」 ―助詞「に」の有無―特集:古事記研究の現在 「神逐らひに逐らひ」と	いて:二〇〇一年から二〇一一年のデータ分析法令に見られるサ変動詞の五段化・上一段化につ	日本語の「が」と「は」に関する覚え書き	志・願望表現との対照― - 日本語の意	/来る」文を例に― 日本語における話し手の視点 ―移動動詞「行く	中古日本語の希求の叙法	階層意味論に基づいた心的態度のアノテーション	More about the Subject-to-Object Raising construction	Indirect Passives and Relational Nouns (I)	固有名とカキ料理構文	Japanese productive causative sentences are not biclausal (but in fact bipropositional and this is not a mere notational variant.)	良寛における「係り結び」の問題	に― 日本語の従属節選択について ―「て」節を中心	わけ助動詞「けり」の使用をめぐって――――――――――――――――――――――――――――――――――――	めぐって― というあひ」における動詞「見える」をいき」「めぐりあひ」における動詞「見える」を視点のあり方とテンス形式 ―二葉亭四迷「あひ	引用形式「って」における主題提示用法	終助詞「ね」の機能	ロドリゲス日本大文典における中性動詞について	イ」/「-シナイ」―の「-シタ?」と「-シナカッタ」/「-シテイナの「-シタ?」と「-シナカッタ」/「-シテイナ現代日本語のテンス・アスペクトと否定 ―過去
自 見 まき子	佐藤	佐藤	カイザーシュテファン	佐佐木	松田謙次郎	郡司隆	孫樹	古 賀 悠太郎	福田嘉一	坂小 野橋 達洋	Ichiro Yuhara	Takashi Iida	小屋逸	Ichiro Yuhara	権田和	塩入する	坂田一	深澤	佐藤雄	中崎	小鹿原 敏 七	山 村 ひろみ
310	豊 303	豊 298	291	隆 **	思 285	男 280	喬 271	261	郎 256	郎平 242	230	218	樹 206	195	土四二	み 184	浩三五	愛二五	174	崇 162	夫 152	بر 141

(49-2)

ハカ-ーー (一二·一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハカーー (一二·一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハカ-lー (一二·一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	八九-一一(一二・一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハカ-lー (ーニ・一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハ九-三 (一二·三) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハ九-二 (一二·二) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	八八-九(一一・九)東京大学国語国文学会 国語と国文学	・言語専攻(文芸言語研究)言語篇・言語専攻(文芸言語研究)言語篇	・言語専攻(文芸言語研究)言語篇・言語専攻(文芸言語研究)言語篇	筑波応用言語学研究 一八 (一一・一二)	筑波応用言語学研究 一八 (一一・一二)	(一二·三) 大東文化大学紀要 人文科学 五〇	文学 二二(一二三)	文学 二 (一一·三) 創価大学日本語日本文学会 日本語日本	一九九 (一一・三) 全国大学国語国文学会 文学・語学	(一二·三) 清泉女子大学人文科学研究所紀要 三三	本文学紀要 八五五(一二十)昭和女子大学近代文化研究所 学苑 日	上智大学 Sophia Linguistica 59	語科学 四五七 (一二三) 首都大学東京都市教養学部人文・社会系	学会 十文字国文 一八 (一二:三)十文字学園女子大学短期大学部国語国文	(一一一〇) 実践国文学 八〇	三二 (一一·一) 志學館大学人間関係学部研究紀要
ノダ文の文法記述	疑問文のスコープと助詞「か」「の」	トの生起》と〈自己のゼロ化〉― 文法に見られる日本語らしさ ― 〈場におけるコ	間メタファアスペクト表示の複合動詞「Vて来る」と空間時	文の階層性と接続構造の理論	論の分岐点―不変化助動詞とは何か ―叙法論と主観表現要素	平安時代語の接続助詞「て」の様相	のために― 一研究史の構造的理解受身文研究の二つの立場 ―研究史の構造的理解	把握量― ―――――――――――――――――――――――――――――――――――	用いた調査・分析― 「京都大学テキストコーパスと分類語彙表を日本語名詞述語文の類型と主語の意味分類につい	位置づけを中心に――受動詞におけるその受動詞についての一考察 ――自動詞におけるその	と行為遂行的発話の対立から―「だ」のモダリティ性について ―事実確認的発話	感情的モダリティ再訪	枝― 動詞の形式性について ―橋本、山田、松下、時	「する」文の格構造	めぐって― 副詞「なにげに」の意味・用法 ―その多様性を	口語作品における打消過去の丁寧表現―マセンカッタとマセンデシタ ―若松賤子の近代	「~ではないですか」類の使用頻度について近代小説等における「~ではありませんか」類と	Light Verb Constructions as Edge Phenomena	上代語「ヲ…ト知ル」	ナ」 『古今和歌集鄙言』 里言における 「ゲナ」と 「サウ	は」「ないし」「それとも」の使い分け選択を表す接続詞「または」「あるいは」「もしく	Inertia World in Non-Past Tense
野	金	尾	坂	大	尾	近	Л	石	今	孟	今	岩	大	大	中	松	嶺	. Yu	小	上	中	Ke
村	水	上	原	堀	上	藤	村	田	田		田	澤	塚	塚	Л	本	田	Yukino KOB	Л	野	俣	Ken-ichiro Kar
剛		圭		壽	圭	泰			水		水	勝			祐		明	ıkino KOBAYASHI	定	左	尚	hiro Kamachi
史	敏	介	茂	夫	介	弘	大	尊	穂	熙	穂	彦	望	望	治	隆	美	IHS	義	絵	己	achi
도	九八	九一	八六	八一	七二	六六	五八	423	411	403	396	390	381	373	五	366	362	346	333	四六	324	317
										(.	49-2)											8

(一一・三)	(一二・一)) 日本語教育 一五三	(一一:]) 南山大学日本文化学科論集 一一	(一二:三) 南山大学国際教育センター紀要 一二	Language and Culture) 一三 (一二・1) 本言語文化専攻 言葉と文化(Issues in 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日	名古屋大学文学部日本語学・言語学研究 室 Nagoya Linguistics (名古屋言語研究) 五(一・三)	五(一・三) 室 Nagoya Linguistics (名古屋言語研究) 五(一・三)	(一二·六) 長崎大学留学生センター紀要 二〇	ウェルサリス 一三-二(一二:三) 獨協大学国際教養学部 マテシス・ウニ	(一一・一)	言語科学論集 一六 (一二十二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	言語科学論集 一五(一一十二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	言語科学論集 一五(一一十二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	一七一(一一·三) 研究会 文芸研究―文芸·言語·思想― 東北大学文学部国文学研究室内日本文芸	六二 (一一·一)	(一二:三)	(一一·三) 東京外国語大学日本研究教育年報 一五	(一二·三) 東京外国語大学 語学研究所論集 一七	(一一:!) 語学研究所論集 一六	(一一·三) 東京外国語大学 語学研究所論集 一六	ハ九-一一 (一二·一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学
狂言台本における「承る」の特殊な用法について	か――「*映画を怖く見ている」とはなぜ言えないの―「*映画を怖く見ている」とはなぜ言えないの日本語における動作主認識の副詞的成分の特徴	Japanese Relative Clause Constructions for Father João Rodrigues	格助詞「に」「へ」の分布に関する調査	――「のこと」が生じる存在文	数量表現に関わるダケの用法について	日本語の述語句構造 ―連結要素をめぐって―	What is the Difference between <i>Ga</i> and <i>Wa</i> in Japanese? The Interface of Syntax, Semantics and Pragmatics Part III	「-ないまでも」節の意味と機能	に基づく分析タイプの結果構文のマクロ・イベントという観点複合的変化事象における図と地の関係 ―三つの	について軽重を表す形容詞「軽い」「重い」の装定と述定	について 指示代名詞「それ」の文脈指示における照応規則	ル形との対比からみたテイル形の基本的意味	りから―「てもらう」文の用法分類 ―動詞の性質との関わ	―国会会議録六三年間の記録から― 丁寧表現「~ますです」の変遷について	う観点から――主語と補語との意味的な関連性といについて、――主語と補語との意味的な関連性とい言語活動を伴う事柄を表わす動詞の人主語受身文	受身文の主語と文中の諸要素との関係を中心に―自動詞の受身文の言語形式上の特徴について ―	がき デーマ企画:特集「ヴォイスとその周辺」 まえ	テーマ企画:特集「モダリティ」 まえがき	Between Lexeme-Forming Derivation and Paradigmatic Inflection	・不連続について・動詞ラル形述語文と無意志自動詞述語文との連続
澤	劉	ĭ	井	大	張	RO	Yas	松	新	楊	鯨	津	金	北田	金	金	風	風	\mathbb{K}	ЛП
田		MURAYAMA, Tor	手	西		N	Yasukuni	浦	妻		井	田		澤村			間	間	MINOURA Nobukatsu	村
倫	怡	YAN	左	美			ni Tak	惠	明	婧	綾	智	殷		俸	俸	使	使	JRA)buk	
子	伶	AA, Toru	友里子	穂	培		i Takano	恵津子	子	瑋	希	史	模	尚紘	呈	呈	伸次郎	伸次郎	atsu	大
<u>一</u> 八	* *	540	534	525	518	511	498	* * *	490 (49-2	485 2)	479	473	466	460	453	445	* *	*	431	=======================================

麗澤大学紀要 九二 (一一・七)	(一二二) 電子学品で、五七年の一二十二)	(一一·一) (一一·一)	(一一・三) 電俗大学国際センター研究年報 二〇	育 九 (一二:三) 琉球大学留学生センター紀要 留学生教	(一二:一二) 留学生教育 一七	(一一·八)	四二(一二一)四二(一二十一)	目白大学人文学研究 八(一二:)	明治大学日本文学 三八 (一二三)	応用言語学研究 一四(一二·三) 明海大学大学院応用言語学研究科紀要	三一-一(一一·九) 松山大学総合研究所 言語文化研究	北海道文教大学論集 一二 (一一三)	一三九 (一一·三) 北海道大学国語国文学会 国語国文研究	(一一:二) 言語と文化 二三文化研究所紀要 言語と文化 二三文化研究所紀要 言語と文化 二三	文教大学国文 四一(一二·三)	文教大学国文 四〇 (一一:三)	(一一一)	(一二・一)	五〇 (一一:三) 国語国文学 国語国文学	(一二:三)	一五(一二三) 東アジア日本語教育・日本文化研究学会東アジア日本語教育・日本文化研究学会	(一一十一) 日本比較文化研究 九九日本比較文化学会 比較文化研究 九九
言語におけるアスペクト的意味の表現	引用述語省略説の残映	森鷗外訳「ふた夜」の疑問表現について	のこと― 現今の引用研究に関する所見一斑 ―山口治彦説	顕在と潜在に関する研究コーパスに基づく引用句内のコピュラ(「だ」)の	です」の使用実態調査コーパスを使った述語否定形「ません」と「ない	―文構造「場所」・「時」の意味を中心に―格助詞「で」と「に」の類義の再点検	存在動詞「ある」「いる」の使い分けの基準	動詞「訪れる」と格助詞	本口語文典』第四版(一八八八)をもとに―明治期における否定表現の認識 ―アストン『日	非飽和名詞と譲渡不可能名詞について	テクストにおけるスル・シタ形式の機能	現代日本語の「どんどん」文の事象構造分析	「ノダ」の認識モダリティ機能	接続詞ダカラについて	「対称関係」からトの機能について考える	条件節と事実	ソ」文と代における終助詞「ガネ」の機能と「連体形+	日本語における話者指向性	―『源氏物語』を資料として―「人々」「人ども」「人たち」の文法的性質	副詞「確かに」の機能	いをめぐって ―語彙レベルでの考察を中心に―「~てください」と「シロ」に使われる本動詞の違	めぐって― 頻度副詞に関する一考察 ― 低頻度を表す副詞を
杉	藤	藤	藤	金	坂	ロ ドゥイ アンゴ	渡	Щ	許	佐西	金	小	中	近	近	鬼	勝	衣	高	白陳	趙	江
浦	田	田	田	城	野	イイウ	辺	西		木山		西	野	藤	藤	Щ	又	畑	山	Щ		
滋	保	保	保	克	永	アトンエ		正		文佑	美	正	友	研	研	信		智	善	博若	彦	雯
子	幸	幸	幸	哉	理	ゴ	萌	子	哲	彦司	仙	人	理	至	至	行	隆	秀	行	之婷	志	薫
683	一 四 九	_ 둦	675	668	664	Ξ	* * *	656	642	633	617	609	601	591	583	574	薑	568	563	559	550	544
										(49-2	2)											10

***・・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

11 (49-2)

(二 三) (二 三) (二 三)		$\bar{\circ}$	人文一〇	解釈学会解釈 五八-三・四(一二・四) 特	解釈学会解釈 五八‐三・四(一二・四) 特集	国文 二三 (一二·三) 大阪府立大学日本言語文化学会 百舌鳥 万:	(一二・一○) 国際研究論叢 二六-一 『哲大阪国際大学 国際研究論叢 二六-一	(一二·一) 大阪国際大学 国際研究論叢 二五-二 『時	(一二·三) 小説 大阪教育大学 学大国文 五五 小説	(一一·三) 外大阪教育大学 学大国文 五四 外	三六 (一一・三) ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	大阪観光大学紀要 二 (一二:三) 「っ	(一二·九) —— 「夜宇都宮大学国際学部研究論集 三四 「夜	(二:三) 的宗都宮大学教育学部紀要 六二-一 現	上田女子短期大学紀要(三五(一二・一) 『溥	語文化研究所紀要 一八(一二六) 華茨城キリスト教大学言語文化研究所 言 華	四二(一二:三) 数青山学院大学日本文学会 青山語文 数	愛知県立大学説林 六〇(一二・三) 特	文化 二七(一二・九) 使愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間 意	語彙
日中比較のための予備的考察―「こんな名前なら買う!」――商品の命名に関する	「から」と「かばね」 ―『源氏物語』を中心に―	―法律用語の訳出傾向―― (集)の漢語訳語(実作麟祥訳『仏蘭西法律書・訴訟法』の漢語訳語	Lijdend/Passiveの訳述起原	―ハツセとトマセ― 特集:古代 万葉地名の異訓と歌枕表現の展開	ついて	万葉集における「のる」と「告ぐ」をめぐって	『邦訳 日葡辞書』の形容詞	『時代別国語大辞典 室町時代編』の形容詞	説の使用語彙の比較	外来語「コミュニケーション」の受容の諸相	――大阪の若者ことばにおける性向語彙の研究より――大阪の若者ことばにおける(女性)性の原理に関する考察	うになったか― いて、―富士山はなぜ「フジヤマ」と呼ばれるよいて、―富士山はなぜ「フジヤマ」と呼ばれるよ	―日本語分析への多元的・動的アプローチ―「夜逃げ」「二人のならず者」「笑いがこみ上げる」	的データの分析― 的考察 ―テキストマイニングの手法を用いた質現代日本語「自己実現」の使われ方に関する基盤	―付 語彙索引― (明治九年)の語彙とその性格	華奢攷	数詞研究四○年	— 「うひうひし」と「よだけし」の語義について特集:天草版平家物語―原拠本と日本語の歴史	ドと語素コードによる分析 三(承前) ― 使用法及び分類枠組についての提案 ―単語コ― 意味分野別語彙構造分析法における意味コードの	
王	塩	南	鷲斉	津	濱	阪	前村	前村	野	井	友	上	佐々	佐々	大	猿	安	尾	田	
	見	雲	尾木	田	橋	上	川田	川田	浪	上	野	田	木	木	橋	田	田	崎	島	
_		千香子	龍美	大	顕		菜	菜	正	博	み	卓	_	英	敦	知	尚	知	毓	
帆	優	子	龍美 知 一世	樹	_	望	菜 穂 武子	菜 穂 武子	隆	文	みゆき	爾	隆	和	夫	之	道	光	堂	
***	==	83	73	*	*	七	67	59	49	35	*** (49-3)	31	26	19	<u> </u>	六	_	*	1	

(一一・一〇) 実践国文学 八〇	言語文化研究 一一(一二三)	四国大学紀要(三六(一・一二)	国立国語研究所論集 三(一二・五)	(一二三) 國學院大學日本語教育研究 三	(一二·三) 國學院大學日本語教育研究 三	(一二六) 國學院雜誌 一一三-六	(一二·四) 國學院大學 國學院雜誌 一一三-四	(一一·一一) 國學院大學 國學院雜誌 一二二-一一	(一一·一一) 國學院大學 國學院雜誌 一二二-一一	(一二:三) 神戸女子大学文学部紀要 四五	四四-1 (一一·四) 皇学館大学人文学会 皇学館論叢	(一二・七) 言語と交流 一五	(一二・七) 言語と交流 一五	(一二・七) 言語と交流 一五	編 六一 (一二二) 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学	(一二·九) 金城学院大学論集 人文科学編 九-一	(一一·一) 杏林大学研究報告 教養部門 二八	(一一·三) 杏林大学外国語学部紀要 二三	要 八(一一二) 京都大学大学院 歴史文化社会論講座紀	語国文 八一-四(一二·四)京都大学文学部国語学国文学研究室 国	語国文 八一-二(一二二) 京都大学文学部国語学国文学研究室 国	五一(一二二) 岐阜聖徳学園大学紀要 教育学部編
から――N-gram 分析による古典研究のこれまでとこれ―N-gram 分析による古典研究のこれまでとこれ―『古今和歌集男性特有表現一覧(改訂版)』	「ら抜き言葉」などについて――問誌に見られる言語規範意識――副詞"とても『・昭和一〇年代の国語学・国語教育・日本語教育専昭和一〇年代の国語学・国語教育・日本語教育専	例―とダケ ―昭和十年前後における役割分担の一事とダケ ―昭和十年前後における役割分担の一事堀辰雄『美しい村』『風立ちぬ』の副助詞バカリ	複合動詞データベース構築のための付与情報	「継続」と「続行」について	む用例に着目して―「相まって」に関する一考察 ―マイナス要素を含	中世室町期における「ねまる」の意味・用法	訓読の連語「ずんばあらず」と、その周辺	事記』四二番歌謡) 特集:古事記研究の現在 「しなだゆふ」考(『古	― 〈百済=倭〉漢字文化圏の観点から― 特集:古事記研究の現在 古事記難語試解	の考察 『玉堂尺牘彙書』における助数詞(量詞)	「すがすがし」の研究	―レジスターの歴史と社会の動き―レシートの数字情報とレジスターに関する語彙	さつ言葉へ こんにちは」の履歴書 遊里言葉から代表的あい	出へのプロセスを考える― 日本語感覚動詞の特徴 ―生理的現象から言語表	突(する)」、「激突(する)」などをめぐって――(漢語サ変動詞の意味・用法の記述的研究 ――「衝	オノマトペによる色彩印象	言語と記憶 ―語の属性と記憶のメカニズム―	容動詞(ナ形容詞)と接尾辞「-さ」の結合―現代日本語における外来語の浸透 ―外来語系形	程 国文学作品から見た日本のもみじ観とその成立過	「住みなす」考 ―隠遁的住居の憧憬―	ロドリゲス大文典における語根について	―『風葉集』不載の十一作品から―中世王朝物語中の『日本国語大辞典』不載語彙
近	新	田	神	孔	吉	山	中	山	瀬	三	村	矢	倉	関	小	牧	玉	玉	西	稲	小鹿原	小
藤	野	中	崎		田	本	村	口	間	保	田	崎	持	口	林	野	村	村	尾	田	原	田
みゆ	直	敏	享	徳	潤	生	幸	佳	正	忠		祥	益	美	英	暁	禎	禎	理	利	敏	
ゆき	哉	生	子	淮	子	佐和子	弘	紀	之	夫	直	子	子	緒	樹	世	郎	郎	恵	徳	夫	勝
171	164	九一	155	147	139	八三	七七七	* *	*	六 九 (4 9	六 -3)	131	125	118	114	109	104	99	五二	四	91	三

六三 (一二·一) 京三 (一二·一)	東京大学国文学論集 六(一一:三)	ハ九-一○(一二·一○) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	八九-九 (一二・九) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハカ-六 (一二·六) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	ハカ-二 (一二: I) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	八ハ-m (一一·一) 川ハ-m (一一·一)	東京大学言語学論集 三一(一一・九)	三一(一二三) 東海大学紀要 外国語教育センター	四七 (一一:三) 超文学論考 超文科大学国語国文学会 国文学論考	六二(一二・一○)言語専攻 文芸言語研究 言語篇	学部紀要(七(一二・一)	学部紀要(七(一二・一)	国文 九一(一二九)	国文 九〇 (一二·一) 専修大学日本語日本文学文化学会 専修	(一二·一〇) 専修大学学会 専修人文論集 九一	二〇一(一・一一) 二〇一(一・一一)	(一二-六) 成城文芸 二一九	(一二·三) 成城大学文芸学部 成城文芸 二一八	(一二·三) 成城国文学会 成城国文学 二八	神道史研究 六〇-一(一二・四)	合 四二(一一三) 白百合女子大学国語国文学会 国文白百	ション紀要 八四六(一一・四)昭和女子大学 学苑 英語コミュニケー	(一・八) 軽乗と鑑賞 七六-八	ョン学科 歌子 二〇(一二三) 実践女子短期大学日本語コミュニケーシ
ハワイに残る日本語 ―「おご」を一例に―	閑居友の結縁意識	方語まで― コハシ(怖)の成立と展開 ―中世から近世前期上	とする諸語をめぐって―――「篇」を造語要素漢語の意味変化と新語の発生 ―「篇」を造語要素	谐 いふ」の本義について 一資料としての古俳	『伊勢物語』読解・三題	複合語に見られる間接的な受身的関係について	漢語「- な」型形容詞の伸張 ―-日本語への同化―	食物としての言葉	訓釈・続貂 ―「モドラス」考―『興福寺本日本霊異記』上巻第十九縁「偋」字の	コーパスに見る類義表現:「気がつく」と「気づく」	発現初期の様相― ― 「再考 ― 用語 「考古学」	比喩表現としての助数詞	章) 本文及び語彙索引稿『西国立志編』解題・第十一編(二十七章~四十三	本文及び語彙索引稿『西国立志編』解題・第十一編(一章~二十六章)	『西国立志編』の逆字順二字漢語(二)	芭蕉「清水」考 ―雑の言葉と季語と―	むかし・いにしえ ―日本語雑記・拾遺―	きらやか銀行 ―日本語雑記・十―	宇音接辞〈化〉の論	「かぐら」・「けがれ」の語構成的意味論	―「いときなし」「いとけなし」― 平安時代の物語作品における幼さの表現	日本語における「もの」の根源的概念	歌枕の変容の駒辺と羈旅	・学習者用英英辞典の比較を通して――定型句類の下位分類と辞典での扱い ――国語辞典
高島	野	小	高	河	Щ	斎	永	吉	髙	杉	大	緒	松鈴	松鈴	鈴	野	エ	エ	エ	若	玉	井	木	大
橋田	本	林	橋	村	口	藤	澤	本	橋	本	津	方	本木	本木	木	村	藤	藤	藤	井	木	原	村	塚
久め	東	賢	久	瑛	佳	倫			宏		忠	隆	丹	丹士	丹士	亞	力	力	力	勲	紗	奉	尚	み
子み	生	次	子	子	紀	明	済	_	幸	武	彦	文	丹 士 守郎	士 守郎	土郎	住	男	男	男	夫	紗也香	明	志	さ
239	九五五	七	一七九	* * *	一七三	一 六 六	224	217	一 <u>六</u> 二	209	202	195	*	*	一 四 九	_ 四 二	薑	二元	Ξ	<u>-</u> 0	웃	189	101	182
											(.	49-3)												1.4

- , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	日本言語文化研究会 日本言語文化研究	一六 (一二十〇) 日欧比較文化研究会 日欧比較文化研究	(一二:二)	(一一・三) 南山大学日本文化学科論集 一一	的日本文化研究 三(一二三) 現代文化研究センター JunCture 超域 名古屋大学大学院文学研究科附属日本近	Language and Culture) 一三(一二:) 本言語文化専攻 言葉と文化(Issues in 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日	Language and Culture) 一三 (一二・) 本言語文化専攻 言葉と文化(Issues in 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日	Language and Culture) 一二(一一三) 本言語文化専攻 言葉と文化(Issues in 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日	言語文化論集(三四-一(一二・一〇)名古屋大学大学院国際言語文化研究科	言語文化論集(三三-二(一二:1) 名古屋大学大学院国際言語文化研究科	言語文化論集(三二-二(一一:三) 名古屋大学大学院国際言語文化研究科	室 Nagoya Linguistics (名古屋言語研究)室 Nagoya Linguistics (名古屋言語研究)五 (一・三)	研究紀要 四四(一二三)中村学園大学・中村学園大学・中村学園大学短期大学部	二〇 (一二十一二) 言語文化研究	ミュニティ振興研究 一二(一一三)常磐大学コミュニティ振興学部紀要 コ	一二 (一二·三) 同志社女子大学大学院文学研究科紀要	二九 (一二:三) 同志社女子大学総合文化研究所紀要	四八(一一·六) 四八(一一·六)	(一一·三) 東京女子大學日本文學 一〇七	(一一·三) (一一·三) (一一·三) (一一·三)	文学 四四(一二三)東京学芸大学国語国文学会 学芸国語国
	探求!けもの命名学	ぼかし効果の「的」	査― 実在する名前を使ったアンケート調について ―実在する名前を使ったアンケート調日本語非母語話者の日本人の名前の性別判断能力	— 実在する名前を使ったアンケート調査— 日本語母語話者の名前の性別判断能力について	国語への語彙浸透を中心に―の相互影響 ―二〇世紀以降の英和辞書による中や集:文化の越境と翻訳 英華辞典と英和辞典と	移動動詞「おちる」の意味分析	「憎い」と「憎らしい」に関する考察	『懐風藻』山林隠逸詩から『古今集』「山里」歌へ	味分析コーパスを利用した複合動詞「V1-通す」の意	意味分析 コーパスを利用した複合動詞「V1-果てる」の	類義語ミアヤマル・ミマチガエルの意味分析	―複合動詞の存否を中心に― 上代日本語の動詞連接「トリ-」について	ージーランド)調査報告(四)―和製英語はどこまで理解されるか ―現地(ニュ	―付・異文「ことならふ」とその派生語――――――――――――――――――――――――――――――――――――	On the Distribution of the Interpretations of the te-iru Construction in Japanese	会議録のデータから――名詞と尺度的形容詞類の共起頻度の推移 ―国会	の理解――「電気」という言葉 ―気の思想によるエレキテル	との比較から――『万葉集』の「池」 ―記紀・風土記の作られる「池」	源氏物語の天体描写について	Ellipsis of Word Parts in Japanese	現代日本語における外来語の品詞性について
	中	梅	六	六	陳	太	石	田	杉	杉	鷲	阳	山	堤	Tadashi	服	吉	佐	Щ	ISHI	北
	Ш	田	Ш	Ш		田	黒		村	村	見	部	根		ıshi	部	野	竹	澤	ISHIHARA Yuki	澤
	安	紘	雅	雅	力	真由	利江子	云			幸		_	和	Baika		政	美	茉	Ϋ́ΑΥ	
	奈	子	彦	彦	衛	美	字	明	泰	泰	美	裕	文	博	ika	匡	治	穂	莉	'uki	尚
	* * *	328	323	319	* *	* * *	* *	310	303	295	288	281	276	薑	262	256	三		==0	243	<u>-</u>
15										(49-3)	3)										

大学紀要 一〇(一一一) 文京学院太学外国語学部 文京学院短期	(一一十一) 京都語文 一八佛教大学国語国文学会 京都語文 一八	(一一・一一) 藤女子大学国文学雑誌 八五	福岡国際大学紀要 二五 (一一・三)	(一二:三) フェリス女学院大学文学部紀要 四七	五六 (一二二) 五六 (一二二)	一五(一二·三) 広島女学院大学大学院言語文化論叢	(一一:七)	ニーニ(一ニ・三) 国文学攷 国文学区	ニーニ(一・一)) 国文学攷 広島大学国語国文学会 国文学攷	(一一・七) 一橋大学国際教育センター紀要 ニ	一五(一二三)東アジア日本語教育・日本文化研究東アジア日本語教育・日本文化研究学会	一五 (一二·三) 東アジア日本語教育・日本文化研究学会東アジア日本語教育・日本文化研究学会	(一二·三) 梅花女子大学文化表現学部紀要 八	学会 清心語文 一四 (二二・九)ノートルダム清心女子大学日本語日本文	学会 清心語文 一四 (二二九)	学会 清心語文 一三(一・九) ノートルダム清心女子大学日本語日本文	(一二・一二)	(一二·六) 日本文学協会 日本文学 六一-六	(一二:三)	(一一・三)	(一二:三) 文学部 六一	(一一·三) (一一·三)
―「ド-」「ブ-」「ブチ-」を中心に― 語頭濁音語を派生させる接頭語について	さがお説の検討 一朝顔、桔梗、槿、昼顔、のあ	語について 『日葡辞書』における「たいせつ(大切)」の類義	日本語教育史における入門期教科書の基礎語彙Ⅰ	立― 気づかない位相語とその用法の成将棋の用語 ―気づかない位相語とその用法の成	『仮名貞観政要』の和訳語について	外来語「リアルな」「リアルに」の語義の変遷	歌」の一考察―――挽歌「男子名は古日に恋ふる山上憶良と「子」 ―挽歌「男子名は古日に恋ふる	する受容意識について日本人大学生とトルコ人大学生の個別外来語に対	平安時代和文における「ほこる」と「おごる」	現代日本語における家族から呼ばれるときの呼称	万葉集の「声」 ―海人の呼び声―	ムレ攷	「物越し」考 ―源氏物語の関係表現―	の日本語辞書の意味記述検討を通して主体的表現「やはり/やっぱり」の成立:近現代	古語「かなし」についての考察	語対応表現の示す認識「やっぱり」と'after all': 日本語の主体的表現と英	egoとワタクシ	古代の歌ことば「イザコドモ」について	―認知言語学との接点― 長崎県平戸島における筆名の命名原理と空間単位	分析BCCWJ長単位情報に基づく形状詞の語構成の	名詞的ふるまいについて新聞コーパスにおける二字漢語動名詞の動詞的・	観の考察――相互行為の「場」における文化的自己置づけ、―相互行為の「場」における文化的自己日本語の親族呼称・人称詞に見る自己と他者の位
鈴	田	漆	占	勝	橋	渡	李	トク	土	セアペザ	近	金	中	加	滝	加	堀	保	今	富士池	船中田	藤
木	中	﨑	部	田	村	邊		トクソズ	居	、フリ・	藤		Ш	納	口	納	井	坂	里	池	戸條辺	井
	みどり	正	匡	耕	勝	かか	暁	ベント	裕美子	フリバデ	健	泳	正	麻衣子	美	麻衣子	令以知	秀	悟	優	は清和 る な美子	洋
豊	ŋ	人	美	起	明	ŋ	梅	F	子	7	史	和	美	子	穂	子	知	子	之	美	な美子	子
432	二 九 四	二八九九	428	421	二八四	403	二七七	* * *	二六九	395	389	379	Ξ	373	三	366	364	蓋	354	349	342	335
											(49	-3)										16

	492	ian ido	yı N C ubila	Shy lney	Ong Shyi Nian Rodney C. Jubilado	The Linguistic Integration of English Borrowings in Modern Japanese	(一一·一○) 立命館アジア太平洋研究センター ポリ 立命館アジア太平洋研究センター ポリ
	五五五	子	翔	込	中	オモロの対句表現からみる神女	立正大学国語国文(四九(一一:三)
	蓋	子	信	澤	高	を中心に―「あそばせことば」について ―明治期の文学作品	(二二·八) 立教大学大学院日本文学論叢 一二
(49-	三四四	殷	知		李	副詞「多分」の史的変遷をめぐって	(二二·八)
3)	482	晃	和	藤	伊	様相 ―洋楽専門書と『広辞林』を中心に―近代日本語における西洋音楽用語の流入と定着の	横浜国大国語研究 二九 (一一・三)
	475	明	正	島	中	用(一) 用(一)	安田女子大学紀要 三九 (一一:一)
	470	己	克	岸	Ш	「頑張る」における構造と変化	安田女子大学紀要 三九 (一一:1)
	465	子	元	藤	齋	『和英語林集成』にみる地理用語の訳定	ルチュール 五-一(一一・三)明治学院大学教養教育センター紀要 カ
	三	憲	利	木	金	科学用語の接点「宇宙」の語源と語義の変遷 ――古代中国語と近代	明治大学日本文学 三八 (一二:三)
	456	雄	史	上	井	美化語「お」の循環過程と幼児語の「お」	(一二·三) 明海大学外国語学部論集 二四
	==	治	力	詰	坂	(け)す」の場合― ―動詞「消(け)つ」と「消漢文訓読語と和文脈語 ―動詞「消(け)つ」と「消	(一二:<)
	三三	弥	英	江	入	王権現の由来をめぐって― 日本武尊伝承の創出 ―武蔵国号神社、武甲山蔵	武蔵野大学文学部紀要 一二(一一:三)
	449	薫		田	福	メカニズムの分析(一)「電子メール」とその競合的同義語の選択に関わる	(一二·三) 北海道教育大学 人文論究 八一
	442	元	園		靳	「~的」に関する一考察	一二(一二·一二) 北海道大学大学院文学研究科研究論集
	三七	愚			張	―上代から中世前期までの用例を中心に―本邦文献に見られる漢語「迷惑」の受容	(一二·三) 文献探究の会 文献探究 五〇
	三〇九	久	清	橋	髙	『莠句冊』と『康熙字典』(一)	(一一:三) (一一:三)

*・・・・論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文

*・・・・特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文

***・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

第四分冊(文章・文体・音声・音韻)

一 文章・文体

(一一・五) 解釈と鑑賞 七六-五至文堂 国文学 解釈と鑑賞 七六-五	(一二:三) 実践国文学 八一	(一一:一〇) 実践国文学 八〇	(一一・一○) 実践国文学 八○	言語文化研究 一〇(一一三)静岡県立大学短期大学部言語文化学会	一○-二(一二:三) 一○-二(一二:三)	学研究 四七(一二二)	(一·七) 共立女子大学 文學藝術 三五	(一一·三) 岐阜聖徳学園大学国語国文学 三○	(一·三) 関東学院大学 人文科学研究所報 三四	(一一·:) (一一·:)	(一二:三)	ーー七 (一二·七) お茶の水女子大学国語国文学会 国文	一五(一一·七)お茶の水女子大学国語国文学会 国文	稿(三九(一一・三))の山大学言語国語国文学会の同大国文論	(一二:三) 大妻女子大学国文学会 大妻国文 四三	(一二·三) (一二·三)	(一一:三) 学大国文 五四	(一二・一二)	ス学部篇 ー (一一三) 愛知淑徳大学論集 メディアプロデュー	愛知淑徳大学国語国文 三四(一一三)
枕詞の古代性をどう見るか	ング的特徴の喪失―ニューミュージックの歌詞の分析 ―フォークソ	一般フォークの比較―フォークソングの形態素解析 ―関西フォークと	尾崎紅葉の文体意識	「羅生門」の本文異同について	大学生の読書経験と文章理解力の関係	生成を探る―「詞のいきほひ」から俗語訳の文体宣長は笑う ―「詞のいきほひ」から俗語訳の文体	もたちはみな踊る』とメタファー―うつす(映・写・移) ― (村上春樹) と『神の子ど	「やまなし」論 ―賢治童話の起源―	ードゥギー/ジュネット論争(一) ミシェル・ドゥギーの「commeの詩学」 序説	「お見通し」発言とその翻訳	「半信半疑」の存在意義新聞折り込みチラシにみられる体験談における	の料理記事を対象に― ―雑誌『主婦の友』レシピの文体に関する研究 ―雑誌『主婦の友』	―式目からわかることとわからないこと―『運歌新式追加並新式今案等』解釈上の問題点	『播磨国風土記』の「南毘都麻」について	指標 国語・国文学論文におけるアカデミック性判断の	問題点の観察をもとに――学生の語彙量、記述上の形式的規則に見られる―学生の語彙量、記述上の形式的規則に見られる「文章表現」指導内容再考のための一考察	て藤沢周平「蝉しぐれ」における剣技の描写につい	江戸時代前期の噺本に現れた「ござる」	から『文章世界』への移行―「文章=世界」を生きる中学生たち ―『中学世界』	「一人見て」という表現
大	山棚	山棚	木	田	澤	塚	は	大	郷	西	大	原	生	大	中	平中柴中	野	三	永	岩
浦	内田	内田	Ш	貝	崎	本	んざわ	沢	原	嶋	谷	田	田	坪	尾	林谷田尾	浪	原	井	下
誠	博輝	博輝	あ	和	宏	泰	λ	正	佳	義	鉄		慶	併	桂	一由 桂	正	裕	聖	紀
士	之嘉	之嘉	あづさ	子	_	造	いち	善	以	憲	平	彩	穂	治	子	利郁実子	隆	子	剛	之
四九	107	92	84	四 五	74	三七	*	六	65	55	48	42	=======================================	\equiv	29	20	11	1	\equiv	_

(49-4)

七四(一十三)	六三 (一二二)	六三 (一二·二) 宋京学芸大学紀要 総合教育科学系一	漢文訓読と漢学論 九六 (一一六)東大比較文学会 比較文学研究 特輯:	東京大学国文学論集 六(一一:三)	(一二:七)	(一一・七) 中央学院大学人間・自然論叢 三二	研究所年報 ニニ (一一・八) 筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化	創価大学別科紀要 二一(一一:三)	二〇三 (一二・七) 文学・語学	二〇二 (一二三) 文学・語学	(一一·三) 成城国文学会 成城国文学 二七	(一一·三) 成城国文学会 成城国文学 二七	成蹊大学 成蹊国文 四五 (一二三)	成蹊大学 成蹊国文 四四 (一一三)	上智大学国文学科紀要 二九 (一二三)	上智大学国文学科紀要 二八 (一一:三)	上越教育大学研究紀要 三〇(一一二)	本語教育学(四五八(一二三)) /東京都立大学人文学部(人文学報)日 首都大学東京都市教養学部人文・社会系	本語教育学(四五八(一二三)) /東京都立大学人文学部(人文学報)日 首都大学東京都市教養学部人文・社会系	本語教育学(四四三(一一三))本語教育学(四四三(一一三))	島大国文(三三(一・三)	(一・小) 至文堂 国文学 解釈と鑑賞 七六-八
小説テクストにおける受身表現の使用傾向	― 音読と黙読の比較――	文章産出困難感尺度の作成とその妥当性の検討	周作人の文体と漢文訓読	堀辰雄のプルースト翻訳	―日本人大学生の小論文の分析から― 小論文における「論理の明確さ」に関する一考察	冒頭を対象に――――宮部みゆき「殺し屋」	メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ	── 文化の翻訳 ──『伊豆の踊子』に見る"表現の美学』 日本語とフランス語の表現を通して見る〈抒情〉と	上代散文の文体について ―和漢混淆文前史―	―与謝野晶子から田辺聖子へ―『源氏物語』現代語訳における和歌の翻訳	『土佐日記』解釈の諸問題	ツツアルの歴史的展開 ―文体差に着目して―	『風立ちぬ』における「客体化」表現をめぐって	隠喩と提喩の境界事例について	―節(Clause)を用いた文体分析の試み(四)― 嵯峨の屋おむろ「薄命のすゞ子」の「である」体		イ 『ごんぎつね』のスタイルとマルチモダリテ	「姉小路式」における歌末への関心	「姉小路式」における修辞表現について	新聞紙面と新聞記事データ集の相違について	にかかわって― 宮沢賢治・《文語詩稿》生成の一面 ―『歌稿〔B〕』	仮名散文の創出 ―古今集仮名序をめぐって
山	碩岸柄	飯梶岸	劉	戸	福山	水	緒	鈴	小	中	妹	竹	森	森	服	服	畔野	劉	劉	長	島	渡
本	本	島井		塚	田本	藤	方	井	谷		尾	内			部	部	上村			長谷川	田	辺
和	しず 健太	里芳	岸		亜裕	新	隆	宣	博	周	昌	史	雄	雄			歩眞	志	志	守	隆	秀
恵	しず 太か学郎	美明学	偉	学	紀子	子	文	行	泰	子	典	郎	_	_	隆	隆	歩眞 木 美夫	偉	偉	寿	輔	夫
198	193	187	五	四四四	179	172	164	149	툿	1 11/11	Ξ	二 五	144	139	九 九	八二	132	七四	六五	119	五八	蓋
19											(49-4)	ł <i>)</i>										

(一一:三)	(一一:三) 早稲田大学国語教育研究 三一	(一一:三) 電谷大学国際センター研究年報 二〇	部紀要 五七(一二三)	部紀要 五六(一一:三)	(一一・五) 文芸と批評 一一-三	文教大学国文 四〇(一一:三)	佛教大学 文学部論集 九五(一一:三)	(一一:))	二一三 (一二三) 広島大学国語国文学会 国文学攷	一橋大学 言語文化 四八(一一:一)	(一一·九) 比較文化研究 九八日本比較文化学会 比較文化研究 九八	(一一:三) 比較文化研究 九六日本比較文化学会 比較文化研究 九六	日本大学 桜文論叢 八三(一二・九)	一六 (一二・七) 日本言語文化研究会 日本言語文化研究会 日本言語文化研究	ミュニティ振興研究(二二(一一・三)常磐大学コミュニティ振興学部紀要(コ	学専攻 四七(一一:三)東洋大学大学院紀要 文学研究科 国文	言語科学論集(一六(一二十二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	ー七二 (一一・九) 研究会 文芸研究―文芸・言語・思想―― 東北大学文学部国文学研究室内日本文芸	七六(一二三)	七六(一二三)
明治期のディケンズ翻訳	論からの検討―俳句の鑑賞指導と「切れ字」 ―切れ字の機能構造	スペイン語への俳句の翻訳の可能性を考える	一考察(~「君が代」も含めて~中学校歌唱共通教材の歌詞の定型詩構造に関する	一考察・小学校歌唱共通教材の歌詞の定型詩構造に関する	人法」の成立― 「他者の言葉」で語ること ―賢治童話における「擬	体を中心に――――――――――――――――――――――――――――――――――――	式― 文学作品解釈の認知プロセス ―文学性の認知図	川端康成の『竹取物語』現代語訳	―『古今和歌集』仮名序の影響をめぐって―『方丈記』の用語と文体に関する一考察	して―	ついて― 正岡子規とH・スペンサー ―『文体の哲学』に	日本基督教団『讃美歌二一』の歌詞について	Usage of "Shall" in the Japanese Penal Code	星新一のショートショートにおける発話文の役割	察― 高橋虫麻呂の対句表現 ―対の意識についての考	麻續王哀傷歌考	──の要因 ──コーパスを用いた定量的分析を通して同一名詞の反復から見たジャンル間の文体差とそ	―品詞構成の変動に注目した分析―――品詞構成の変動に注目した分析――	―今昔物語集・古事談との比較――宇治拾遺物語の「けり」のテクスト機能	に於いて――皇奉為前建春門院被修法華八講御願文」との比較皇奉為前建春門院被修法華八講御願文」との比較「高倉院御筆御八講初座表白」の特徴 ―「高倉天
梅	藤	太	木	木	中	Л	橘	沼	青	石	広	内	Hic	山	田	池	鯨	鯨	藤	滝
宮	原	田	暮	暮	村	口	髙	尻	木	黒	本	山	Hideyuki KUMAKI	田	中	原	井	井	井	沢
創	マリ	靖	朋	朋	晋		眞	利			勝	榮	UM/		真	陽	綾	綾	俊	優
造	子	子	佳	佳	吾	良	郎	通	毅	圭	也	美	KI	瞳	理	斉	希	希	博	子
三四	三人	278	274	270	≘	260	252	<u>=</u>	一 九 四	241	236	231	221	* * *	兰	一生	214	208	一六五	一六〇
									(49	-4)										20

一音声・音韻

一九- (一一·三)	(一二:三) 日本の一番の一番の一番の一番の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本	際研究 六 (一一·三) 山梨県立大学国際政策学部紀要 山梨国 節	本語学日本文学専攻 一六 (一一三)安田女子大学大学院文学研究科紀要 日 法	大学紀要(一二・二)文京学院短期(四文京学院大学外国語学部・文京学院短期)四	文教大学国文 四一 (一二:三) 音	(一一三)中	ども学部紀要 ニ	日本音響学会誌 六八-一〇 (一二・一〇) 声	日本音響学会誌 六八-五(一二・五) 音	日本音響学会誌 六八-五(一二・五) 日	(一一·三) 正新潟大学 人文科学研究 一二八 声	ニニー (一一・三) JA 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	学 二五 (一二一二) ――――――――――――――――――――――――――――――――――	獨協大学英語研究(六九(一一・一〇) 日	六二(一一一) 東京学芸大学紀要 人文社会科学系一 朗	東京外国語大学論集 八二(一一七) 田	(一一:三)	六一 (一二·三) ――――――――――――――――――――――――――――――――――――
ングル音注を通して一七世紀の撥音に関する考察 『捷解新語』のハ	日本語小咄の音響分析	節用文字の反切	法華経音義における法華経漢訳陀羅尼字の扱い	四拍語を後部成素とする複合語の連濁について	音声学的アクセントと音韻論的アクセント	中世における『論語』古写本の声点について	さについての検討――――――――――――――――――――――――――――――――――――	声質の伝える情報とその関連量		特徴分析日本語、中国語、朝鮮語における破裂子音生成の日本語、中国語、朝鮮語における破裂子音生成の	正節』へ― 『平家吟譜』から『平家声の伝承・声の記号化 ―『平家吟譜』から『平家	AGAINST THE NON-RAISING ANALYSIS OF JAPANESE RAISING-TO-OBJECT	―中国語話者とモンゴル語話者を対象に― 日本語学習者における日本語母音無声化について	―都営バスとロンドン・バス― 日英のバスにみられるアナウンスの音調特徴	朗読音声のイントネーションの定性的比較	研究日本語の母音の音色とフォルマントについての一	「ぜ」について	― 音調型の分析― 無語尾のオノマトペはどう発音されるか
中	角	=	沼	鈴	城	石	山三	粕	都	鏑	鈴	Nac	蘇	大	白	益	坂	那
山	岡	戸	本	木	生	山	下雲	谷	田	木	木	Naoyuki Akaso		西	勢	子	梨	須
めぐみ	賢	麻砂	克		倬	裕	智真	英	青	時	孝	i Ak	迪	雅	彩	幸	隆	昭
み	_	彦	明	豊	佰太郎	慈	智真 理 香子	樹	子	彦	庸	aso	亜	行	子	江	三	夫
529	520	中の三	二九八	510	505	500	491 (4	488 19-4)	485	479	六	471	463	453	450	441	六〇	432

・・・・論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文

*

**・・・・特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文

***・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

432 425

Keisuke Honda 須 昭 夫

筑波応用言語学研究 一八 (一一・一二)

On the moraic nature of hiragana and katakana

第四分冊増刊(方言)

方言

九州大学言語学論集 三一(一一一)	岐阜大学国語国文学 三七 (一一三)	一八 (一二三) 神田外語大学大学院 言語科学研究	(二十三) Reientific Approaches to Language 11	《 二十三】 (二十三)	(一二・三)	七- (二: ○)	一六−1 (一一・1 ○)沖縄国際大学日本語日本文学研究	一六−一 (一一・一○) 沖縄国際大学日本語日本文学研究	四六-1 (二二·七) 沖縄県立芸術大学附属研究所 沖縄文化	報編 六 (一一·三) 大阪府立大学 言語文化学研究 言語情	三七 (一二:) 大阪教育大学国語教育学会 国語と教育	九 (一一・一) 大阪大学 阪大社会言語学研究ノート	九 (一一・一) 大阪大学 阪大社会言語学研究ノート	九 (一一・一) 大阪大学 阪大社会言語学研究ノート	九 (一一・一) 大阪大学 阪大社会言語学研究ノート	日本語・日本文化 三八 (一二三) 大阪大学日本語日本文化教育センター	大分大学 国語の研究 三六(一一・三)	(一一・三)	(一一・一二)	(一一・一一)	
韻現象 長崎県本土西南部方言の動詞テ形における形態音	かる」について 共通語ならびに岐阜方言における「連用形+にか	象の動向 神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現	Wh-Questions and their Interactions with the Particle <i>To</i> in Nagasaki Dialect	神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化	タ」「〜テンタ」「〜テモタ」を中心に――――――――――――――――――――――――――――――――――――	南琉球・多良間水納島方言の名詞の格形式	知恵」知恵」まで、一般では、「は、「は、」では、「は、」では、「は、」では、「は、」では、「は、」では、「は、」では、「は、、」では、「は、」では、「は、、」では、「は、、」では、「は、、」では、「は、、 これが、 これが、 これが、 これが、 これが、 これが、 これが、 これ	琉球言語史構想(その一)	オモロ語「かなし」と「きよら」の比較研究	実態泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用の泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用の	を用いたグループ分けのかけ声表現と分布傾向大阪府域の若年層における「グー・チョキ・パー」	対比して― ―標準語の「って」と福岡市若年層方言のッテ ―標準語の「って」と	和歌山県上富田町方言の文末詞「ニ」	大阪方言の文末詞デとワ	山形市方言における引用・伝聞形式テとド	ト『聞いておぼえる関西(大阪)弁入門』のアクセン	―宮良方言のウヨーホールンを中心に――琉球八重山地方の授受動詞の二方面敬語	方言使用の効用 ―その世代的位置と特性―	アクセント研究における「下降」の位置づけ	「とびはね音調」は同意要求表現か?	
有	山若	木久	KA	久木	佐	下	下	高	冏	松	方	亚	井	野	渋	角	荻	大	吉	田	
元	田井	川野	KAZUKI KUWABARA	野川	木	地	地	橋	部	本	方言ゼミナ	塚	Ш	間	谷	道	野	橋	田	中	
光	敏祐	行マ	/AB/	マ行	秀	賀代子	賀代子	俊	美菜子	直	チー	雄		純	勝	正	千 砂 子	純	健	ゆか	
彦	弘太	y 央子	ΊRA	子央	仁	子	子	三	子	樹	ル	亮	暁	並	己	佳	子	_	=	b,	
155	150	140	130	124	115	103	96	78	_	68	60	54	50	42	35	* * *	30	20	9	1	
23										(49	-4増))									
۵0																					

三五 (一一三) 大東文化大学大学院 日本文学論集	(一二·三) 大東文化大学紀要 人文科学 五〇	(一一·三) 信州大学人文社会科学研究 五	四八 (一一·六) 東京都立大学国語国文学会 都大論究	四〇(一一二)	(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一一・一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一	滋賀大国文 四九 (一二・一)	国立国語研究所論集 四(一二・一)	国立国語研究所論集 三(一一:五)	国立国語研究所論集 三 (一二・五)	ビュー 三-一 (一二・七) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	ビュー 三-一 (一二・七) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	ビュー 三-一 (一二・七) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	(一・一) 國學院雑誌 一一二-一二	(一一·五) 國學院雜誌 一一二-五	二二(一一・三) 神万大国文学会 神女大国文	神戸外大論叢 六二-五(一一・一一)	(一二・三) (一二・三)	甲南大学紀要 文学編 一六一(一・三)	甲南大学紀要 文学編 一六一(一一:三)	皇學館大学紀要四九(一一・三)	一一四 (一二·一二) 九州大学国語国文学会 語文研究	一一·一(一·一· D) 九州大学国語国文学会 語文研究
方言「ドグラマグラ」について	琉球古典音楽の詩歌の日・英・西語 訳Ⅱ	式の広がり― と用いた意志表現 ―新しい形松本平方言の-ツを用いた意志表現 ―新しい形	用法 ――用法拡大に関する考察――西日本諸方言における補助動詞「おく」の (持続)	者のコソア――高橋調査法による、二〇一〇年中四国地方の若指示代名詞の直示用法における領域調査	Tohoku Dialects as a Speech of Rednecks —Language Crossing in Japanese TV Programs—	―人の移動との相関に注目して―富山県における勧誘表現の伝播とその要因	ータ分析 ―原因・理由表現―「全国方言文法の対比的研究」調査の概要とそのデ	討― 意識調査データを用いた潜在クラス分析による検 話者分類に基づく地域類型化の試み ―全国方言	とその周辺地域のアクセント体系西日本における「昇り核」の方言:鳥取県青谷町	方言意識調査」と統計分析― 方言意識の現在をとらえる ―「二〇一〇年全国	方言分布の変化をとらえる	奄美喜界島方言の母音の特徴について	と地理的分布と地理的分布	現と音声変化の例― 首都圏方言における大学生の言語生活 ―挨拶表	―形式の受容と切換えの要因― カジュアルスタイルにおける方言切換え	トについて 京阪方言における「3+2」複合名詞のアクセン	中心に――標準語の「でも」との比較をに関する一考察――標準語の「でも」との比較を奄美大島瀬戸内町方言のとりたて助辞「アティム」	副詞「がっつり」―と周辺方言、家島町方言の命令表現「~マ」、四拍と周辺方言、家島町方言の命令表現「~マ」、四拍ことばの分布地域の意外性について ―播州方言	―大学生とハル敬語、テヤ敬語の状況―神戸市における方言敬語の衰退について	ジゴクの語誌	鹿児島方言の「動詞連用形+オル」	ニ」の史的展開中央語と鹿児島方言における「動詞連用形+サマー央語と鹿児島方言における「動詞連用形+サマー
今	田	上	梁	岡	Shi	松	三竹	前田	松	相	大	木	三	久	(橋	中	水齊	松山都	小	齌	久	久
井	仲	條	井	﨑	Shigeko KUMAGAI	丸	井田	田中	森	澤	西	部	井	野	本木	井	谷藤	本田染	谷	藤	久保薗	久 保 薗
秀			久	友	MAC	真	は晃	忠ゆ か	晶	正	拓一	暢	は	マ	礼礼	幸	美美	勝賢直	博			
和	勉	厚	江	子	ÌΑΙ	大	は晃 る み子	彦り	子	夫	郎	子	はるみ	マリ子	子子	幸比古	保穂	太 郎治也	泰	平	愛	愛
六	333	328	319	309	300	$\frac{-}{\overline{\bigcirc}}$	284	271	261	255	249	243	236	226	216	205	191	184	一 五	$\overline{\circ}$	174	165

(49-4増)

(一一:三) 化較文化研究 九六日本比較文化学会 比較文化研究 九六	(一一·三) 日本女子大学紀要 文学部 六○	(一二:六)	(一二・三) (一二・三)	(一二・九) 言語研究 一四二	(一二·九) 言語研究 一四二	(一二·九) 言語研究 一四二	(一二・九) 目本言語学会 言語研究 一四二	(一二・九) 目本言語学会 言語研究 一四二	二五 (一一·八) 鳴門教育大学国語教育学会 語文と教育	□三− (一・一○)	一九 (一一·一二) 言語文化研究 言語文化研究	(一二・七) 総合学術調査報告 五八市山川町 総合学術調査報告 五八徳島県立図書館 阿波学会紀要 吉野川	言語科学論集 一六 (一二十二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	(一一・九) 文化 七五-一・二	(一一·三) 東京女子大学言語文化研究 一九	(一一·三) 東京女子大学言語文化研究 一九	東京大学言語学論集(三一(一二・九)	東京大学言語学論集 三l (ll·th)	東京大学言語学論集(三)(一一九)	(一二:三) 中京国文学 三	(一二:三) 中京国文学 三一	中京大学文学会 中京国文学 三〇	二七(一二・七)
部区域を中心に――	彙 ―赤連と小野津の比較から――喜界島祖語における三型アクセント体系の所属語	「ミソリンゴ」の分布と語源解釈について	言意識調査から――山形県三川町調査・首都圏大学生調査・全国方イメージ語からみた方言ステレオタイプ	奄美語の現況から	八丈方言における新たな変化と上代語	Converbs and Their Desubordination in Ōgami Ryukyuan	釈宮古多良間方言における「中舌母音」の音声的解	名詞― 名詞―	高知市方言における温度形容詞の意味論的考察	「はる」の意味分析	徳島県旧貞光町端山の方言アクセント	吉野川市山川町の方言	―場所を示す名詞+ラヘンを中心に――――――――――――――――――――――――――――――――――――	象に――青森県・秋田県の朝の出会いの場面を対域差 ――青森県・秋田県の朝の出会いの場面を対待遇的観点から見たあいさつ表現の使用実態の地	中越方言の音韻分析	中学生を対象として――岩年層の方言使用と方言意識 ――愛知県豊明市の	岡山市方言の複合動詞のアクセント	岡山県妹尾方言におけるジャとナの含意	トについて(二) 三重県鈴鹿市方言の後部三拍複合名詞のアクセン	造紙、すのこ、カ変仮定形、サ変否定形―名古屋市を中心とする言語地図 ―休み時間、模	─一○~六○歳代の話者を対象として─三重県鈴鹿市方言の二拍名詞アクセント	理― 現代東日本方言の「ベー」(二) ―用法分化の論	宮崎県東諸の方言について
泉	松	本	田	田松	金	HT	青	上	橋	藤	村	峪村仙	佐	中	廣	近	高	高	平	玉	原	玉	合
	森	間	中	畑本	田	THOMAS PELL	井	野	尾	森	田	口田波	藤	西	田	藤	Щ	Щ	田	懸		懸	原
文	晶	晴	かゆ	千泰	章)MAS PELLARD	隼	善	直	秀	真	有真光	亜	太	康	紗	林	林			優		加
明	子	香	b D	秋丈	宏	RD	人	道	和	美	実	有真光 香 子実明	実	郎	子	耶	林太郎	林太郎	秀	元	子	元	加奈美
527	517	512	504	498	486	* *	477	461	450	445	436	431	425	415	408	399	385	376	369	361	* *	Ξ	349
25										((49-4	増)											

九六 (一二五)	(一・一) 自然科学 六○−・二社会科学 自然科学 六○−・二	応用言語学研究 一四 (一二三)明海大学大学院応用言語学研究科紀要	(一一・三) 明海大学外国語学部論集 ニニ	(一一・三) 明海大学外国語学部論集 二三	三五 (一一・三) 法政大学沖縄文化研究所 琉球の方言	三五 (一一・三) 法政大学沖縄文化研究所 琉球の方言	三五 (一一・三) 法政大学沖縄文化研究所 琉球の方言	三五(一一・三)	三五 (一一・三) 法政大学沖縄文化研究所 琉球の方言	(一二・九)	(一二・九) 方言・音声研究 六	(一二・九)	(一二・九)	佛教大学 文学部論集 九五 (一一:三)	(一二:三) 福島大学国語教育文化学会 言文 五九	六一(一二二)	福岡大学人文論叢 四三-四(一二・三)	福岡大学人文論叢 四三-三(一・一二)	(コニミ) フェリス女学院大学文学部紀要 四七	(一二三) 広島大学日本語教育研究 二三	(一一・三) 広島大学国際センター紀要 一	二一(一二:三) 日本語教育論集
京都市方言の接続助詞・終助詞「シ」の用法	テ形における形態音韻現象 熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞	美化語の「お」と幼児語「お」の全国分布	方言の使用における男女差 ―滋賀県を例に―	方言番付と言語番付	与那国方言動詞活用形のアクセント資料	出版のために「『久高島方言辞典』福治友邦・加治工真市共著」	八重山西麦島(祖納)方言動詞の活用タイプ	―石垣方言ヴォイス研究のためのおぼえがき―派生関係からみた有対自動詞と有対他動詞	ン 首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーショ	京阪式アクセントのノサ言葉	アクセント記号付き香川県伊吹島方言会話資料	兵庫県東播地方における方言の地域差について	京阪式アクセントにおける否定諸形の音調比較	Whaling Songs in Japan as a Reflection of Cultural Practice	教材の授業での活用を目標にして――「方言と共通語」福島県達南地域の方言の研究 ―「方言と共通語」	の変容― - 一大分県方言談話五〇年辞去の場面の談話分析 - 一大分県方言談話五〇年	―大学生の実態― 九州・中国八県における不快感を表す形容語(下)	―大学生の実態― 九州・中国八県における不快感を表す形容語(上)	東北方言における極限のとりたて助詞サエ	奄美大島龍郷町浦方言の丁寧語	若年層に見る日本文化	イト」の用法 ―砺波市・南砺市を中心に―富山方言の伝聞の文末表現「-ト」「「-ッテ」「-ガ
船公	有	井	山	桜	上	福加 治 治工	金	島かり	永	中	中	岡	加	Feli	菅	杉	山	山	竹	重	平	苗
木	元	上	下	井	野	治星	田	島袋し	永野マドセ	井	井	村	藤	Felicity Gre	野	村	県	県	田	野	澤	田
礼	光	史	暁		善	友真	章	幸げ ひさ 子さ	セ 泰ン	幸比古	幸比古			ty Greenland	理	孝			晃	裕	洋	敏
子	彦	雄	美	隆	道	邦市	宏	子さ	泰ン 子	古	古	瞬	望	nd	恵	夫	浩	浩	子	美	_	美
727	720	714	707	701	692	669	659	648	640	637	632	627	622	613	607	595	577	552	545	541	537	533

(49-4増)

二○-二 (二二·九) 二○-二 (二二·九)	麗澤大学紀要 九四(一二・七)	麗澤大学紀要 九二(一一・七)	集 一八 (一二:三) 日本東洋文化論 琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論	集 一七 (一一:三) 日本東洋文化論 玩球大学法文学部紀要 日本東洋文化論	集 一七 (一一:三) 日本東洋文化論 琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論	集 一七 (一一:三) 日本東洋文化論 琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論	琉球大学 言語文化論叢 九 (一二・三)	九六 (一二·五) 立命館大学日本文学会 論究日本文学
ーチ 「共創空間」開発技法(CCHDモデル)からのアプロ 医療現場における患者の方言使用問題を問う:	命令・依頼との共起和歌山県南紀方言における終助詞「ヨ」・「丿」:	「丿」と「彐」に関する覚え書き和歌山県南部方言における文末以外で用いられる	日本における方言学と言語地理学	今帰仁掟および北谷掟宛の古琉球辞令書について	琉球語におけるナ行エ段音の変遷	モーダルな文のタイプと焦点化助辞(おぼえがき)	那覇方言音韻対応	―当為表現との関わりから― 近世以降の東西方言における禁止表現の史的研究
大内	大	大	上	高	石	かり	野	湯
場田	野	野	村	良	崎	かりまた	原	浅
裕加 奈 之美	仁	仁	幸	倉	博	しげひさ	三	彩
之美	美	美	雄	吉	志	う さ	義	央
792	787	780	*	775	758	745	736	三九

*・・・・論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文

**・・・・特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文

***・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

(49-4増)

コミュニケーション

京都精華大学紀要(二一・三)	京都教育大学紀要 一二〇(一二三)	京都教育大学紀要(二二〇(二二三)	五一 (一二:二)	ン研究 二三(一・三)神田外語大学 異文化コミュニケーショ	(一一·三) 川村学園女子大学研究紀要 二二-二	(一二・一○)	(一二・一○)	報編 六 (一一:三) 大阪府立大学 言語文化学研究 言語情	三六 (一一・三) 大阪教育大学国語教育学会 国語と教育	大分大学 国語の研究 三七(一二:三)	教育研究 二(二二三) 桜美林大学大学院言語教育研究科 言語	教育論叢、八(一二三)	 	教育論叢 八(一二三) 桜美林大学言語教育研究所 桜美林言語	教育論叢 八(一二三) 桜美林大学言語教育研究所 桜美林言語	CD-ROM版 一三(一一·三) 松花学園大学人文学部研究紀要	上田女子短期大学紀要 三四 (一一一)	(一二:一) 茨城大学留学生センター紀要 一〇	(一二:) アポ大学留学生センター紀要 一〇	(一二二)	(一一・九) 愛知論叢 九一愛知大学大学院 愛知論叢 九一
「少女」などの言葉に対する大学生の意識について	及ぼす影響曖昧性耐性と文脈情報の利用がアイロニー理解に	幼児のコミュニケーションと談話標識「じゃあ」	―あいづちを手がかりにして――初対面三人会話における共話的会話展開	―予備調査による尺度の改訂―「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成	女学生の言葉遣いに対する社会的意識の変化	聞き手に気持ちを伝えるための非言語表現	非言語表現の要素とその効果	とその変化女性向けのことば遣いのマナー本にみる言語規範	経験と意識を通して――大阪教育大学学生の告白告白という言語行為 ――大阪教育大学学生の告白	しつつ― 「依頼形」内部の形の区別特徴 ―命令形をも展望	義的観点から――復言語話者にとってのことばの意味 ――複言語主		への帰国生徒の言語と教育 ―	─統計的手法を用いて─中国における日本企業X社社員の対日意識	とその要因 ―普通体の指標的意味に着目して―初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷	日本語の曖昧性について外国人日本語学習者から見た場面的意味における	考察教育場面における言語行為の特質に関する予備的教育場面における言語行為の特質に関する予備的	要求質問への応答に係わる予備的考察位置に反応する文法(否定疑問文を使用した説明	在住の主婦の場合― 日本人の外国・外国人観に関する研究 ―茨城県	出身者の場合― ―中国の少数民族外国人の対日観に関する研究 ――中国の少数民族	ただく」の場合―― 「一人でです」「~ていいです。 「「からないです」 「からないです」 「からないです」 「「からない」 「「からない」 「「からない」 「「からない」 「いっぱい」 「いっぱい」 「
秦	西	森	大	池小	長	高	大	増	福	趙	小	島松モ作ラク	生	横	篠	宋都劉	山	杉	池安	安	犬
	村	Щ	塚	田山	崎	Щ	島	田	西		泉	田原レスス	木	田	崎		П	浦	田		飼
美香子	佐彩子	他卓	容	慎	靖			祥	昌	彦	聡	美礼	倫	葉	佳	晶恩麗	美	秀	庸龍	龍	明
字	子	汽 ⁺ 名郎	子	裕治	子	昇	武	子	平	志	子	幸子	子	子	恵	晶珍芸	和	行	子洙	洙	子
142	136	129	124	111	103	五.	_	93	87	81	75	(65	57	50	45	39	31	24	17	1

(49-5)

(一二・九)	(一一・三)	(一一: 1)	(一一:1)	(一一:1)	(一一:1)	育センタージャーナル 七(一二·三) 島根大学外国語教育センター 外国語教	育センタージャーナル 六(一一·三) 島根大学外国語教育センター 外国語教	一○-二(一二三)	四国学院大学論集 一三七 (一二・三)	(二:=) 日本アジア研究 九課程紀要 日本アジア研究 九場玉大学大学院文化科学研究科博士後期	(一二:三) 教養学部 四七-二	(一·九) 埼玉大学紀要 教養学部 四七-一	国立国語研究所論集 四(一二・一一)	(一二:三) 國學院大學日本語教育研究 三	(一一:=)	(一一・一二) 國學院雑誌 一一二-一二	四八(一二三)四八(一二三)	四七(一一三)	(一一·一二) 言語処理学会 自然言語処理 一九-五	二九 (一二·三) 人留米大学文学部紀要 国際文化学科編	(一二:九)
約形	による内容分析――デキストマイニングによる形態素分析とKJ法―デキストマイニングによる形態素分析とKJ法日本の大学生におけるうつのしろうと理論	変容 ―パラグアイの広島県人家族を対象に―パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と	り成すテクスト― - 語用とメタ語用の織法廷談話実践と法廷通訳 - 語用とメタ語用の織	―社会による限定と参与者による決定―相互行為における発話の効力を再考する	日本社会の変容とキリスト教用語	ラテジー ―オーバーラップ発話に注目して―日韓初対面接触会話におけるポライトネス・スト	ジー ―オーバーラップ発話に注目して―日韓初対面会話におけるポライトネス・ストラテ	自然的意味再考	同意要求の用法を持つ文中の「ね」	動の動機づけにおける社会的要因―相互作用における言語行動 ―自他志向と言語行	「いや」の否定性と談話での機能	応答詞「そうですね」の機能について	―受恵表現にみる敬語の民主化――――――――――――――――――――――――――――――――――――	―ビジネス文書文例集を資料として―ビジネス文書における「あしからず」の機能	ーについてビジネス文書におけるポライトネス・ストラテジ	識の変容外国人学生との合同授業を通した日本人学生の意	表現」と役割語との接点――常用性のある「属性「ボク少女」の言語表現 ―常用性のある「属性	ツンデレー落下の演出	ン・動作タイプの推定に基づく顔文字の推薦マイクロブログにおける感情・コミュニケーショ	に基づく分析― アイロニー発話における推論過程 ―関連性理論	半疑問イントネーションの談話分析
原	山朝坂岡勝	中	吉	水名	小	林	林	飯	集	河	小	小	松金井	諸	諸	福	西	渋	関江	安池	福
田	本川本 谷	東	田	島塩	Л			野	生天目		出	出	田 上	星	星	池	田	谷	村	藤脇	田
幸	真明真 紀	靖	理	梨征	俊	河	河	勝	知	正	慶	慶	謙順史	美	美	秋	隆	倫	洋優	裕惠	浩
_	菜男士隆子	恵	加	紗史	輔	運	運	己	美	_	_	_	次 郎任雄	美智直	美智直	水	政	子	平花	裕惠 介子	子
302	297	289	282	276	268	261	254	244	235	226	220	213	*	206	199	192	186	179	170	156	149

筑波応用言語学研究 一九 (一二・一二)	筑波応用言語学研究 一九(二二十二)	筑波応用言語学研究 一八 (一一・一二)	筑波応用言語学研究 一八 (一一:二)	筑波応用言語学研究 一八 (一一:二)	CD-ROM版 五七(一二三)中国四国教育学会 教育学研究紀要	研究所年報 ニニ (一一・八) 筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化	·応用日本語学研究論究 丸(二二三)言語文化学専攻、指向 日本言語文化学大東文化大学大学院外国語学研究科日本	研究論叢 二八(一一二) 大東文化大学語学教育研究所 語学教育	ュニケーション研究(九(一二・一) 待遇コミュニケーション学会(待遇コミ	ユニケーション研究 八(一一・一) 待遇コミユニケーション学会 待遇コミ	創価大学別科紀要 二一(一一:三)	国文 八八(一一一)	(一二·人) (一二·人)	(一一·八)	CD-ROM版 五二-三(一一三)情報処理学会論文誌 論文誌ジャーナル	CD-ROM版 五二-一(一一·一)情報処理学会論文誌 論文誌ジャーナル	CD-ROM版 五二-一(一一·一) 情報処理学会論文誌 論文誌ジャーナル	上智大学国際言語情報研究所 Sophia Linguistica 59 (一二:三)	Linguistica 59(一二:三)	(一二·九) (一二·九)	(一二·九)
用法」 自然会話に見られる「でしょう」の「念押し確認	日中韓の友人会話における依頼の談話展開	戦後新聞紙面における「男性標示語」の推移	レ行為とサイド・アクティビティーを中心に―相手の否定的側面を語る談話の組み立て方 ―プ	する反省会においての知識の交渉―― 反省会における評価の行為連鎖 ――専門家が同席	ーの実践 ―要約と時間配分について―話すことに関する構成的グループ・エンカウンタ	異文化コミュニケーションと実践型教育	「生死」を救済するか―「生死」を救済するか―	日本語母語話者のアイロニー産出と評価	止められ方を手がかりに―相手に伝わる「ほめ」の条件 ―「すごい」の受け	て―ーション主体の意識に沿ったとらえ直しを目指し「ほめ」とはどのような言語行動か ―コミュニケ	―ラジオのト―ク番組から――協調の原理と日本語の「言い換え」表現について	心理的負担 ―負担の感じ方の転換点を中心に―メールの返信にかかる時間に対する送・受信者の	──相互作用場面と討議の全体構造からの分析 グループ討議における視覚情報化ツールの使用行	スタディ ―視覚情報化ツ―ル使用行為の種類―グループ討議における視覚情報化ツールのケース	コミュニケーション支援システムの構築と評価会話中の名詞の関連情報を用いた対面型異文化間	較用例の正確性評価を目的とした用例評価手法の比	型支援の効果 参言語対面会議支援システムのためのAll for one	The Construction of Request Discourse: A Preliminary Study of the Use of Superiors' Supportive Moves in Superior-Subordinate Interactions in the Japanese Workplace	Unveiling 'Invisible' Conflict Signals in a Japanese-Chinese Interaction		効果― サヤネルに関する研究 ―チャネルの使用とその対面説得事態における対人コミュニケーション・
張	大劉生 天	徐	林	杜	黄	中	田	中	伊	伊	伊	宮	長	長	吉岡	吉福	吉宮	Jun	Lisa FAII	細	大横
	和自					村	中	村	藤	藤	東	嵜	田	田	野本	野島	野部	Junko SAITO	Lisa Fairbrother	馬	坊山
恵	啓雅知	微	始	長		良		香代子	由希子	由希子	美智留	由	友	友	健		真	SAI	OTH	宏	郁ひ と 夫み
芳	子静美	潔	恩	俊	潔	廣	寛	子	孚	孚	留	美	紀	紀	孝吾	孝拓	孝衣	ГО	ŒR	通	夫み
475	467	460	454	446	* *	440	433	421	413	405	398	392	384	377	366	357	350	339	328	319	310
										((49-5))									30

(一二:六)	(一二·三) (一二·三)	(一二・三) 日本語用論学会 語用論研究 一三	一六 (一二·七) 日本言語文化研究会 日本言語文化研究	(一二·九)	九二(一二六) 南山大学 アカデミア 文学・語学編	(一一・一一)	名古屋大学文学部日本語学·言語学研究室 Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)六(一二三)	名古屋大学文学部日本語学·言語学研究 五 (一一三)	二八-二(一一・三)	言語科学論集 一六 (一二・一二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	心理学部(八(一一三)東京成徳大学研究紀要(人文学部・応用	(一二:三) 東京女子大学言語文化研究 二〇	(一二:□) 東京女子大学言語文化研究 二○	五一-一(一一二)	六三(一二二) 東京学芸大学紀要 総合教育科学系二	国語教育研究 二九 (一一一) 東京学芸大学国語科教育学研究室 学芸	東京外国語大学論集(八四(一二・七)	(一二三) 東海大学紀要 国際教育センター ニ	集 三三 (一一・三) 外国語教育論	筑波応用言語学研究 一九 (一二十二)
ブログにおける男女間の語使用の比較と分析	つある男女差――若者のおしゃべりにおける談話調査 ―縮まりつ	いて 談話標識としての指示表現「そりゃ」の機能につ	依頼のロールプレーにおけるフィラー	として― 皆のなりたちと言語景観 ―東京・秋葉原を事例	イエント間の情報共有をめぐるケーススタディ―言語運用から見た促進方略 ―セラピスト・クラ	待遇表現「させていただく」の語用論的分析	持と親近感表示の両立を糸口に――贈与交換システムから見た人間関係の距離の維 -贈与交換システムから見た人間関係の距離の質的転換 授受形式によるポライトネス上の距離の質的転換	表現「〜テイタダク」を例に―現選択の幅の拡大、―日本語における行為の授受ポライトネス理論における社会的制限の変化と表	学部「学びと探究の方法」の場合――――――――――――――――――――――――――――――――――――	告 ―《私たち》タイプに注目して―キャラクタのタイプと役割語に関する意識調査報	PROVIDING ACCESSIBILITY OF INFORMATION RESOURCES FOR DEAF AND HARD-OF-HEARING STUDENTS: A Report on the Efforts of One Small-Scale University in Japan	える影響 ―初対面同士の会話に注目して―大学生男女の「沈黙」がコミュニケーションに与	みる言いわけ― (言いわけ) にみる配慮の表現 ―「断り」談話に	ハワイピジン英語の中の日系文化	関する従来の研究と今後の研究課題吃音児・者の語レベルの処理と文レベルの処理と	本語の特性〉の教育へ向けての一考察再生産される「多言語性の隠敝」 間言語的〈日	待です」「~をよろしくです」― 文の意味・機能 ―「~を徹底取材です」「~に期ニュース報道およびブログ等に見られる「~です」	―日中合同授業の教室活動から― 日中両語の依頼ストラテジーの使用と表現形式	Comprehension Strategies: Pre-production Considerations in the Translation Process	確認要求のストラテジーを例に―テジーの再考察 ―上昇イントネーションによるテジーの再考察 ―上昇イントネーション・ストラ会話分析を通してのコミュニケーション・ストラ
菅	木	小	周	林冨早田	丹	近	横	横	森	宿	Margare Satoshi NAK	堀	竹	篠	伊髙	笹	鈴	峯森	Jeroen	許
原	村	Ш		田川中	羽	藤	倉	倉		利	Margaret Pine OTAKE Satoshi NAKAYAMA		本	田	藤橋	平	木	谷山		
順	華	典		直洋ゆ	牧	利	真	真	弘	由	et Pine OTAKE AYAMA	ے ص	紗	左	友三	真	智	秀美	BODE	挺
子	子	子	莉	樹悠平り	代	恵	弥	弥	_	由希子	ne .KE	み	世	左多江	彦郎	真之介	美	秀美 紀 美子	DE	傑
622	614	*	* *	606	588	579	572	565	560	554 (49-5	544	* *	535	530	526	519	510	499	491	483
31										, 20	,									

・教育・心理(二二)(一二・二)	(一二・一) 自然科学 六一-一・二社会科学 自然科学 六二-一・二	(一二-一) 自然科学 六一-一・二社会科学 自然科学 六二-一・二	四一(一一·一) 四一(二一·一)	目白大学総合科学研究 八 (一二:三)	明治大学教養論集 四七三(一一九)	応用言語学研究 一四(一二三)明海大学大学院応用言語学研究科紀要	(一一:1) 明海大学外国語学部論集 二三	(一二·三) 三重大学国際交流センター紀要 セ	一二 (一二·一二) 北海道大学大学院文学研究科研究論集	一二(一二十二) 北海道大学大学院文学研究科研究論集	一二 (一二·一二) 北海道大学大学院文学研究科研究論集	(一二:)) 文化外国語専門学校紀要 二五	二一○ (一一・☆) 国文学攷 (二一○)	究 二八(一二三) 三語表現研兵庫教育大学言語表現学会 言語表現研	(一二:三) 一橋大学大学院 言語社会 六	一五 (一二·三) 東アジア日本語教育・日本文化研究	白鴎大学論集 二六-一(一一九)	(一二·八) (一二·八)	日本のローマ字社 Rômazi no Nippon 659 ()	五一(一二二) 日本女子大学国語国文学会 国文目白	紀要 八一(一一三) 日本大学文理学部人文科学研究所 研究	(一二·六) 日本大学国文学会 語文 一四三
響をある。一般では、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	「ね」の必須性	単語販売に関する経済言語学的試論	フロー理論で構築する「がんばれる」の概念構造	フレーム・コンテント仮説の一検証	語用論の諸相、そしてその意味(一)	談話の特徴からみたハワイ日系人社会の日本語	Predicting When "Wrong" becomes "Right": Language Use in the Public Domain, that Changes Perception	る一考察 マレーシア語母語話者のターンテイキングに関す	―形式整理と分類基準を中心として― 言語的修復行動における他者開始について	指示詞の発話機能 ―ポライトネスの観点から―	え方場面形成上の聞き手待遇における「聞き手」の捉	後の課題 これまでの日中の「謝罪」表現研究の問題点と今	――情報のなわ張り理論の観点から「あいづち」の使い分けにおける中国語話者と日本	話し合い活動におけるメタ言語の相互作用的活用	能力の測定結果を事例としての研究の日の研究の日の正の子の下の日の子ストによる移民児童の言語運用日本におけるロシア出身移民の母語・継承語教育	ディハワイ日系二世の言語切替えに関するケーススタ	言語表現法の実践	規定要因 保育カンファレンスにおける談話スタイルとその	を事例に 関する研究 「honne and tatemae(本音と建前)」 日本語の会話表現における直接的・間接的表現に	の有無と話し手の意図を基準として――真偽疑問文に対する否定応答の分類 ―「いいえ」	「難聴」のしろうと理論	ブログにみられる若者ことばの年代差・男女差
小目	中	有	Щ	宮	浜	山	Jun	勝	張	李	呉	高	王	大	バソ	島	井	秋中	Iwa	吉	勝	首
杉高	野	元	岸	原	П	下	June-ko	田				橋		江	ソ ヴァ	田	上	田坪	Iwamoto Hi	田	谷	藤
考美	伸	光	克	温		暁	Matsui	順	玲	京	泰	優		寒	オ・リ	め	次	他熹史	oto Hidekazu	吏	紀	花
司咲	彦	彦	己	子	稔	美	tsui	子	玲	和	均	子	婧	実代子	ガ	めぐみ	夫	他喜史 三代 名美典	azu	沙	子	花里奈
761	긎	755	749	744	727	720	714	710	701	694	688 (49-	684	677	一 九	九	670	655	649	644	637	633	629
											(49-	·5)										39

麗澤大学紀要 九五(一二・一二)	(一一:三) 電谷大学国際センター研究年報 二〇	立命館大学大学院 On Language and Language Education 5 (「一一二)	立命館大学大学院 On Language and Language Education 4 (一一三)	六二八 (二二一〇) 立命館大学文学部人文学会 立命館文學	六二一二 (一一三) 横浜市立大学論叢 人文科学系列	CD-ROM版 一三(一二·三)山梨大学教育人間科学部紀要
ーケット島を事例として観光産業従事者の言語マネジメント ―タイ・プ	落語の談話的構造―「間」と「音調」	A Corpus-Based Approach to Cultural Differences in Verbal Expression: From the Comparison of Japanese and American Motion Pictures, "Shall We Dance?"	客と接客者の会話分析	ことばが力を失ったあと	のか、父親が使う自称詞:なぜそこでそれが選択される	成するか ―大学生の説明スキーマを探る― 大学生はランダム配列の説明文をどのように再構
山	角	Sat	中	児	佐	堀岩
Щ	岡	Satomi Y	田	玉	藤	堀岩 之 内永
和	賢	i Yamazaki	梓	徳	響	志正
彦	_	zaki	音	美	子	直史
814	807	* *	791	780	768	765

・・・・論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文

**・・・・特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文

***・・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文

・応用日本語学研究論究(九(一二三)言語文化学専攻(指向)日本言語文化学大東文化大学大学院外国語学研究科日本	二〇二(一二三)	(一二·四) 語コミュニケーション紀要 八五八 昭和女子大学近代文化研究所 学苑 英	化創造学科紀要 八五三(一十一)昭和女子大学近代文化研究所 学苑 文	会学 四五二 (一二三) 人文学報 社/東京都立大学人文学部 人文学報 社首都大学東京都市教養学部人文・社会系	二六 (一一·七) 比較文化論叢 札幌大学文化学部紀要 比較文化論叢	七五(一・一一) 札幌大学外国語学部紀要 文化と言語	七五(一・一一) 札幌大学外国語学部紀要 文化と言語	ビュー ニー (一二七) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	(一二:三) 文化学部編 六一高知県立大学紀要 文化学部編 六一	(一二:)	九州大学言語学論集 三二(一一一)	(二十三) Roientific Approaches to Language 11	(一二:三)	(一二・三) お茶の水女子大学人文科学研究 ハ	大阪観光大学紀要 一二(一二:三)	(一二・三) (一二) (一二・三) (一二) (一二・三) (一二) (一二)(一二)(一二)(一二)(一二)(一二)(一二)(一二)(一二)(一二)	ーション学科論集 一二(一二三) 茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケ	(一二:三) 文学部紀要 四一	文化 二六 (一一·九) 爱知学院大学人間文化研究所紀要 人間	一言語学
擦 ―原典史料集成の現代的意味を求めて― 戦前戦中における日タイ間の言語文化の接触と摩	ら〈自由直接話法〉へ― (自由間接話法)か	する考察― する考察―	語源学の技法 ―言語教育に生かす習得法―	会学的分析に向けて――メタファーの社メタファーによる語りと示し ―メタファーの社	ついて ―『桐壺』巻(二)― 韓国語訳『源氏物語』における解釈上の諸問題に	日本語話者のモノの認識と類別詞	Langacker の主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification)	宜蘭クレオール	琉球語と古代朝鮮語の比較言語学的考察	ダイクシスと「語り」	構文の検討― 否定呼応に関する心理言語学的考察 ―シカナイ	アラン・ダンダスの言語文化論	多義語を用いた比喩表現の認知過程に関する検討	再考―	言語習得のメカニズム ―核心と周辺をめぐって	―バフチンの対話論の視点――言語活動従事に関与している知識は何か	効果 ―理論的概観― 問題解決・説明文理解・学習における図的表現の	的表現の訳出に関する一考察裁判員制度プロモーションビデオに見られる日本	―法廷通訳に期待される役割と現実― 裁判員裁判制度における外国人刑事事件と通訳	
田	緑	井	岸	林	金田	井濱	對濱	簡真	橋	三	備	斎	塚	古	樋	西	有	中	中	
中	Щ	原	山	原	中	上田	馬田	田	尾	木	瀬	藤	本	田	上	П	富	村	村	
	真知子	奉		玲	智幹	紗英 葉 璃人	康英	月信	直	悦		武	真	徹		光	美代子	幸	幸	
寛	学	明	睦	洋	慧子	悉 璃人	博人	真治	和	三	優	生	紀	也	勲	_	子	子	子	
157	七	150	144	137	122	108	83	78	72	60 (49-	45 -5増)	38	36	_	33	27	13	7	1	

(一二十一) 武蔵大学人文学会雑誌 四四-一・二	究紀要 一七 (一一·三) 北海道立アイヌ民族文化研究センター研	(一二·三) (一二·三) (一二·三)	集 国際日本学 九 (一二·三) 法政大学国際日本学研究所研究成果報告	(一二・三) (一二・三) 文松研究所紀要 言語と文化 二四文教大学大学院言語文化研究科付属言語	(一一·三) 弘前大学教育学部紀要 一〇五	(一二・一二) 歴史言語学 一日本歴史言語学会 歴史言語学	日本読書学会 読書科学 五四-一・二(一二・三)	(一二・三) 日本読書学会 読書科学 五四-一・二	(一一:一)	(一一·三) 日本女子大学紀要 文学部 六○	(一二·三) 日本語用論学会 語用論研究 一三	日本言語文化研究会論集 八 (一二・九)	学 二五 (一二・一)	(一二·三) (一二·三)	東京外国語大学論集(八二(一一・七)	ハカ-ll (ll:)	ハ九-一一(一二·一一) 東京大学国語国文学会 国語と国文学	東京大学言語学論集 三二 (一二・九)	東京大学言語学論集 三一(一一九)	筑波応用言語学研究 一九 (一二十二)	CD-ROM版 五六(一一:三)中国四国教育学会 教育学研究紀要
言語と文法 ―あるいは、「偏見」について―	意味について アイヌ語千歳方言における推量の助動詞nankorの	池上二良先生「言語学概論」講義	翻訳の正体	翻訳の意味論	読み速度の発達的変化とそのディスクレパンシー発達障害をもつ児童・生徒の有意味語・無意味語	較と先史研究――――――――――――――――――――――――――――――――――――	から― 物語理解における感情理解 ―探索的推論の視点	合の感情理解 ―読解時間による検討―物語の登場人物が同時に複数の感情を経験する場	接語数効果 接語数効果	音楽と言語と脳	言語分析への提言	―五つの側面からの検証―「小笠原混合言語」は本当に「言語」なのか	音象徴語をめぐる言語普遍性と言語個別性	〈言語を語る言語〉の不自由	メタ記憶の発達に関する考察 ―概観と展望―	イメージの意味論	熊把握――(主客合一)的な事態把握と〈主客対立〉的な事修把握――(言語の構造)から〈話者の認知スタンス〉へ	矛盾文と自然言語における規範性の源泉	消 一意味の共有をめぐる幻想―トートロジーにおける等質化概念の混乱とその解	過程《一 系における》自然生態系と自然言語の生成構造と 自然言語生態学 ―生命秩序形成系としての物資	・トマセロの言語習得論の批判的検討―幼児の言語習得に関する理論的研究 ―マイケル幼児の言語習得に関する理論的研究 ―マイケル
新	佐	津曲	宗	城	松	菊	上	上	楠宮中日	加	児	П	飯	Л	上	Щ	池	酒	酒	岡	平
田	藤		意	生	本	澤	原	原	瀬村山野	藤	玉	ング、	田	原	原	梨	上	井	井	崎	田
春	知	敏郎	和	佰	敏	律	友	友	し真泰	雅	徳	ダニエ	香	潮		正	嘉	智	智	敏	仁
夫	己	編	代	佰 太 郎	治	子	友紀子	友紀子	し真泰 の里 悠ぶ子志	子	美	エル	織	子	泉	明	彦	宏	宏	雄	胤
* 35	260	*	249	239	236	229	* * *	* * *	225	210 9-5増	*	205	197	* * *	187	===	<u></u> 四	176	167	* * *	164

(一二·三) (一二·三)	(二二三) 学習院大学人文科学研究所 人文 一〇学習院大学人文科学研究所 人文 一〇	(一一:三) 大妻女子大学紀要 文系 四三	報編 七(一二三) 大阪府立大学 言語文化学研究 言語情	(一一·三) 大阪大学大学院 言語文化研究 三七	文と教育 四四 (一二三) 愛媛大学教育学部国語国文学会 愛媛国	二 対照研究	(一一·三) 早稲田大学 平安朝文学研究 復刊一九	二〇-1 (一二·三) 麗澤大学経済学会 麗澤学際ジャーナル	(一一·四) 類型字研究会 類型字研究 三	六二七 (一二·七) 立命館大学文学部人文学会 立命館文學	六二六 (一二·三) 立命館大学文学部人文学会 立命館文學	立命館アジア太平洋研究センター ポリグロシア(Polyglossia) ニニ	(一二:) (一二:) (一二:)	立教大学心理学研究 五四(一二:三)	CD-ROM版 一三(一二三) 山梨大学教育人間科学部紀要	CD-ROM版 一二(一一·三)山梨大学教育人間科学部紀要	(二・) 自然科学 六一-一・二社会科学 自然科学 六一-一・二	応用言語学研究 一四 (一二:三)明海大学大学院応用言語学研究科紀要	応用言語学研究 一四 (一二:三)明海大学大学院応用言語学研究科紀要	応用言語学研究 一四 (一二:三)明海大学大学院応用言語学研究科紀要	(一二·三) 明海大学外国語学部論集 二四
・英語の結果構文との比較から―インドネシア語の結果構文 ――日本語の結果構文	因について「呼気量変化」(口腔鼻腔流出量比率変化)とその要「呼気量変化」(口腔鼻腔流出量比率変化)とその要言の音韻対応から推定された紀元前約一万年前の東アジア言語(日本語・中国語・朝鮮語)の南北方東アジア言語(日本語・中国語・朝鮮語)の南北方	Japanese, Basque, and the Languages of Eurasia: The Question of Genetic Affiliation	「すみません」と「对不起」の使用条件の対照分析	生物主語から無生物主語へ ―日・仏対照研究―	―『破戒』を中心に―接続助詞「ば」の用法と中国語訳について		リー訳との対比からみえる独自性―ヤマタ・キクによる仏訳『源氏物語』 ―ウェイ	翻訳シフト論の新展開への試論	さまざまな〈膠着〉 ―〈膠着〉再説―	日本語と言語類型	ことばと意味	徴アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特	On Processing Relative Clauses in Head-final Languages: Evidence of coping mechanisms for working memory	時系列刺激弁別 ―ヒトおよび動物の統語能力の基礎をなすもの ―ヒトおよび動物の	メトニミー再考	徴候と痕跡:時間と事態の認識	翻訳の分かりやすさはどこにあるのか	―誤解された横浜ピジン― ピジン研究における英語とアカデミズムの呪縛	WALSによる音韻と統語の相関研究	言語の普遍性とタイポロジー	日中語ピジン ―「協和語」への序章
Ario Wal Sari	あ	Ronald T	陳	春	王		常	河	まっ	児	児	大喜多	Kris	孫	仲	仲	藤	桜	時	原	桜
Ariestyani Wahyu Perwita Sari	ベ	ald Th		木			田	原	\$	玉	玉	多			本	本	本	井	崎	口	井
ni erwi	せい	1 Thornton	臻	仁			槙	清	ひろたけ	徳	徳	紀	Ramonda		康一	康一	幸		久	庄	
ita	Þ	on	渝	孝	曦		子	志	ゖ	美	美	明	ıda	瑞	郎	郎	伸	隆	夫	輔	隆
398	386	381	372	361	* * *		355	349	338	326	317	311	* * *	**	301	295	290	283	277	* *	269

(49-5増)

編 六 (一二・三) イン・社会科学 高研学園研究紀要 A 人文・社会科学	上越教育大学研究紀要 三二 (一二:二)	育センタージャーナル 六(一一·三) 島根大学外国語教育センター 外国語教	三三— (一二一) 志學館大学人間関係学部研究紀要	ビュー ニ (一二六) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	ビュー ニ (一二・六) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	ビュー ニ (一二六) 国立国語研究所 国語研プロジェクトレ	(一一一)神戸市外国語大学研究科論集 一四	高知大学留学生教育 六 (一二:三)	(一二・七) 言語と交流 一五言語と交流研究会 言語と交流研究会	(一二・七) 京都外国語大学研究論叢 七九	(一二:一)	(一二・一)	(一一・一) 京都外国語大学研究論叢 七六	(一○・七)	京都外国語大学 Cosmica 41(一二·一)	(一二:一〇) 言語文化論究 二九	(一二:三) 言語文化論究 二八九州大学大学院 言語文化論究 二八	五〇(一一二) 岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編	(一一·三) 神奈川大学人文学会 人文研究 一七三	(一二·三) 学習院大学大学院日本語日本文学 八
感情表出動詞の人称制限と変化後の局面の二重性	It is that 節構文と「の(だ)」構文	中日否定極性副詞『并』及び『決して』の比較	Two Continuous Periods: Event and Its Bearings on Recognition	述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	節連接の五段階	人魚構文と名詞の文法化	の原因について日中両言語における受身文の使用範囲の差異とそ	語の比較を通して―多義語「打」の諸表現に関する一考察 ――日中両	翻訳を通してみた日中両語のオノマトペ	における日独語対照― オノマトペの伝達上の価値(一) ―物語テクスト	(原文は簡体字) 従許可義看譲字句与『させる』句之間的差別	て―	究(二) 日独語物語テクストにおける直示Deixisの対照研	る比喩表現を中心として― お語における語の有縁性と比喩表現を中心として― ロマン諸語(フランス語、イタリア語、て(一) ―ロマン諸語(フランス語、イタリア語、ロマン諸語における語の有縁性と比喩表現につい	よる比喩表現を中心として―事・諺・成句に見られる季節名・月名・曜日名に比喩表現について(一三) ―フランスと日本の故	の対照 二つの修飾要素を含む名詞句における日中指示詞	「e kata/ota」 ―一人称の移動を対象に―移動方向動詞と結合している「ていく/くる」と	日英語命令形の機能領域の相違	を対象に――日本人・韓国人および日本在住韓国人的研究 ――日本人・韓国人および日本在住韓国人色彩言語から連想される色彩イメージの交叉文化	の小考「濃い/薄い」に対応する韓国語の形容詞について
畠	加	王	Ke	ヹ゚	角	角	古	林	水	乙	王	小	乙	小	小	史	韓	森	三車	禹
Щ	藤		Ken-ich	プラシャント・	田	田	賀		野	政		倉	政	倉	倉				星	
真	雅		hiro Kamachi	ルント	太	太	悠太郎	翠	あ			博		博	博		京	英	宗貞	旲
_	啓	欣	ıchi	シ・	作	作	郎	芳	ゆ	潤	鵬	史	潤	史	史	隽	娥	樹	雄玟	穎
* *	542	532	526	522	517	512	505	497	490	477	471	462	451	443	437	* *	* *	432	420	408

一○一(一二二) 日本比較文化学会 比較文化研究	一○○ (一二·一) 日本比較文化学会 比較文化研究	(一一・一一) 比較文化研究 九九日本比較文化学会 比較文化研究 九九	(一一·九) 日本比較文化学会 比較文化研究 九八	(一一·三) 日本比較文化学会 比較文化研究 九六	(一一·三) 日本比較文化学会 比較文化研究 九六	(一一:) 日本比較文化学会 比較文化研究 九五日本比較文化学会 比較文化研究 九五	一六 (一二·七) 日本言語文化研究会 日本言語文化研究	紀要 八 (一二・七) 日本学生支援機構 日本語教育センター	(一一・1) (一一・1)	ラム 四一(一二・三)	三四-一(一二・一〇)	ウェルサリス 一三-一(一二・一)獨協大学国際教養学部 マテシス・ウニ	研究所研究年報 四六 (二二) 東洋大学アジア文化研究所 アジア文化	言語科学論集 一六 (一二十二)東北大学大学院文学研究科言語科学専攻	ー七二 (一一·九) 研究会 文芸研究―文芸・言語・思想― 東北大学文学部国文学研究室内日本文芸	(一二:三) 文化 七五-三・四東北大学文学会 文化 七五-三・四	日本語・日本学研究 ニ (一二·三) 東京外国語大学国際日本研究センター	日本語・日本学研究 ニ (一二三)東京外国語大学国際日本研究センター	集 三四 (一二三) 外国語教育論	ル 一〇(一二三)中国四国教育学会 教育学研究ジャーナ	(一二·三) 信州大学教育学部研究論集 五
―日本語との比較を中心に― 中国語における待遇表現についての一考察	との関係― 日本語の接尾辞「的」について ―中国語の「的」	―白い巨塔を中心に― 日韓リメイクドラマにおける依頼行動の比較	診療終了コミュニケーション日米比較	照比較研究二日本語と中国語における「商売」に関する諺の対	話進行的機能」 JCLとCNSの比較を通して知る日中語の「会	ウチ・ソト意識とウリ・ナム意識	て ―小学館日中・中日辞典第二版を参考に―中国語の『曖昧』と日本語の「曖昧」の違いについ	動作動詞の日中対照研究「はぐ」・「はがす」と「扯」	Unité syntaxique du français et unité morphologique du japonais dans le syntagme appelé prépositionnel	い表現に焦点を当てて―――――――――――――――――――――――――――――――――――	―「OJ(an)」と「冬r(sok)」― 日本人韓国語学習者のための類義語分析	して― 複数形態素といくつかの言語の複数の表出を観察 複数形態素といくつかの言語の複数の表出を観察 名詞句のサブクラス解釈について ―スペイン語	「餅」と"饼" ――日中対照―	動を中心に――日韓大学生の感謝と挨拶程度の場面に対する行―日韓大学生の感謝と挨拶程度の場面に対する行人間関係による意識と言語・非言語行動の違い	―ナラIと〃(既然/如果) B、那么g〃―根拠による推論形式における日中対照研究	L'Étude contrastive franco-japonaise sur la «désirabilité»	否定関連現象から見た日本語とスペイン語	目的語の省略についての日仏語対照研究	について 『この+人名』の現場指示用法『这个+人名』と「この+人名」の現場指示用法	言語行動の分析― ―不幸にあった相手にとる慰め行動の中日比較 ―不幸にあった相手にとる	について― 語の「彼」「自分」およびゼロ代名詞形の対応関係語の「彼」「自分」およびゼロ代名詞形の対応関係 日英語の三人称代名詞の比較 ―英語のheと日本
邢	王	澤	大	銭	鄭	横	王	水	Yu	伊	李	=	続	李	李	Hir	片	秋	池	張	田小
		田	瀧			山		落	ki T	藤		宮				os	岡	廣	田		中林
文		浩	祥		智	由	志	いづ	TAKE	恵美子	澤		三	在	光	hi Ab	喜代子	尚			江
柱	娟	之	子	清	惠	香	英	み	EI	子	熊	哲	義	濬	赫	bé	子	恵	晋	琳	扶傑
687	* * *	681	674	669	665	660	654	644	630	623	615	610	603	597	592	581	572	562	553	* * *	547

(49-5増)

龍谷大学 龍谷紀要 三二二 (一一:三)	(一二・三) 龍谷大学国際センター研究年報 二一	(一二・一○) グロシア (Polyglossia) □三 立命館アジア太平洋研究センター ポリ	(一二三) グロシア (Polyglossia) ニニ 立命館アジア太平洋研究センター ポリ	四一 (一一·一) 国語国文論集	安田女子大学紀要 三九 (一一:一)	ルチュール 六-1 (二二三)明治学院大学教養教育センター紀要 カ	ーニ六 (一·-·) 明治学院大学英米文学・英語学論叢	応用言語学研究 一四 (一二三)明海大学大学院応用言語学研究科紀要	一二(一二·一·) 北海道大学大学院文学研究科研究論集	(一一·一一) 藤女子大学国文学雑誌 八五	(一一·一) 福井大学教育地域科学部紀要 一	一八-三(一二·三) 広島大学大学院 国際協力研究誌	広島大学留学生教育 一五 (一·三)	(二二三) 広島大学国際センター紀要 二	(一一・三) 広島大学国際センター紀要 一	二一四 (一二·六)	一五 (一二·三) 東アジア日本語教育・日本文化研究	一五 (一二三) 東アジア日本語教育・日本文化研究
English Learners' Attitudes Towards <i>Gairaigo</i>	日本語と英語における受動文	察に東語と日本語の相似点及び相違点に関する一考	A Contrastive Analysis of the Reduplication Process in Bahasa Melayu and Japanese	語-la denawaを例にして― てあげる/くれる・韓国語-a/e cwuta・シンハラ授与補助動詞構文の文法化について ―日本語~	―日本語補助動詞テモラウとの比較を通して―シンハラ語補助動詞wa gannawaの前項動詞	相づちと発話権の交替に関する中日対照研究	行為ストラテジーの日英語比較― 英語と日本語における発話行為連鎖構成 ―相互	──日英語の談話の展開の分析 ──条件表現を中心に	イタリア語と日本語の複文における時制について	日韓におけるオノマトペ運用の諸相	日英多義語の認知意味論的分析:「ムシ」と"bug"	向かって」、「~に向けて」中国語の介詞『向』と日本語の複合格助詞「~に	対照比較考察日中の「茶」に関する諺に見る取り合わせ語句の	て 日本語の「~ニスル」と朝鮮語の'-lo hata'につい	照比較考察 日中の「酒」に関する諺に見る取り合わせ語句の対	ついて ―中国語との対照という視点から―「目的語残存受身文」における目的語残存の条件に	う視点から― 日本語のリズムに関する一考察 ――日中対照とい	出会いのあいさつ言語行動の対照研究再考
Frai	姫	林黄	Ong	宮	宮	楊	生	水	チェ	冏	皆	裴	浮王	深	浮王	于	宋	劉
Frank E. DAULTON	田		Ong Shyi Nian 他三名	岸	岸		田	谷	マリアンナ	部	島		田	見	田			
JLT	慎	翠力	ri Nian 他三名	哲	哲		少	信	ア・	友加 里			三	兼	三		協	静
NC	也	芳游	名n	也	也	晶	子	子	Ť	重	博	麗	郎雪	孝	郎雪	康	毅	慧
822	815	811	808	803	796	789 (49-	780 -5 1 色)	773	763	754	746	740	733	728	720	713	706	696
						(49-	りた目し											

***・・・・著作権者と連絡がとれなかったため紹介にとどめた論文 **・・・・特集号・専門誌などに掲載されたために紹介にとどめた論文 *・・・・論説資料のページ数の制約により、掲載できなかった長大な論文